

1993年1月28日 発行

ISSN 0917-5695

埼玉昆虫談話会

# 寄せ蛾記

yosegaki

66号



表紙の昆虫

ツマキチョウの蛹

表紙 絵とデザイン・・・小堀 文彦



1993-1-21

江村董 様

埼玉昆虫談話会々長

牧林 功

会費の件について

大寒の候、貴台におかれましては益々ご健勝のことと、拝察いたし  
子す。

日頃は、当会の維持発展のためご尽力をいたさざりありがとうございます。

さて、今年は当会発足30周年にあたります。この節目を3年かかりで「埼玉県昆虫誌」の発行に向けて取り組むこと決めたところです。ニュースレター「縁友路地」を月刊で発行し、キャンペーンを張っています。  
どうかよろしくご協力下さい。

なお当会の年度は4月より翌3月までであり、年会費は3,000円で  
あります。

貴台の会費は今年度 納入済み ござりますので、ご連絡申  
上げます。未納額 3,000円をいかが、ご納入下さるよう  
お願ひします。郵便振替口東京 3980 牧林功宛て  
です。

.....

## 武藏野の雑木林の衰退と蝶の変遷(4)

石塚 祥法

.....

### 第一部『失われた平野部の蝶』

#### その4 ヒョウモン類

私の少年時代、最も情熱を持って追っていたのが、ヒョウモン類である。当時の平野部のヒョウモン類はウラギンスジ、オオウラギンスジ、メスグロヒョウモンの3種が主体で、ミドリ、ウラギン、オオウラギンヒョウモンは稀であった。クモガタヒョウモンは記憶にない。

私が初めてヒョウモンの姿をみたのは、1948年の荒川の河川敷であったと思う。蝶に興味を持ったのがそのころだったので、特に、印象に残っていた。荒川の河川敷でみたヒョウモンは多分、ウラギンスジヒョウモンであったと思う。当時はウラギンスジヒョウモンが多く、他のヒョウモン類は少なく、オオウラギンスジヒョウモンがたまに採集できる程度であった。

ヒョウモン類は衆知のごとく、夏は休眠して、秋に再び姿を現す。しかし、それらの個体はすでに傷んでいて、標本には不向きの個体ばかりであったが、秋の個体は不思議な魅力があった。初夏では見られないヒョウモン類が何故か姿を現すからであった。その最たるもののはメスグロヒョウモンであった。

ウドの花が満開になる9月下旬、ウドの花に群がっているのは、メスグロヒョウモンが多く、しかも、特異な姿をしたメスが多かったので、少年の私は興奮して、ネットを振ったものであった。

稀にウラギンヒョウモンが訪れる事もあった。私が経験したのは、1951~53年頃の事であったが、メスの裏面の銀色の鮮やかさは今でも脳裏に焼きついている。この蝶は当時4頭採集したが、すべてメスでオスの採集経験はなかった。秋のヒョウモン類はメスが多いのである。時には、ミドリヒョウモンも採集できた。この蝶もすべてメスであり、裏面の緑色が印象に残っていた。

これらの蝶の観察場所は、現在の浦和市原山から大田窪に至るウド畠であったが、今ではすべて住宅地に変貌しており、当時の面影はない。今から40年も昔の事だから現在では夢の出来事のような気がしても当然であろう。

ヒョウモン類の初夏の採集は荒川の河川敷か、周囲の堤防が好採集地であった。時期は6月下旬から7月上旬である。この頃の荒川流域は蝶のパラダイスであった。オオムラサキ、ミドリシジミ等のゼフィルス、ヒョウモン類、タテハ類と蝶の採集には最適の季節であった。

1951~53年にかけて、私が自慢できたのは、次の記録である。

1952年7月上旬、ミドリヒョウモン 1♂ 採集

1953年7月上旬、オオウラギンヒョウモン 1♂ 採集

オオウラギンヒョウモンは翌年、1954年7月29日、八ツ岳本沢温泉で1♂採集したのが生涯最後の記録である。現在はオオウラギンヒョウモンは幻の蝶となっているようであるが、私にとっても35年以上も出会っていない真正の幻の蝶となってしまった。

当時の荒川の流域はウラギンスジヒョウモンが圧倒的に多く、オオウラギンスジヒョウモンが10%の割合で、ミドリヒョウモンは記録的存在であったのである。ウラギンヒョウモンの姿は一度もこの流域では見ていない。

×      ×      ×      ×      ×      ×      ×

歳月が過ぎ、1980年代になって、何故か昔のヒョウモン類に会いたくなつた。それまで、全く関心がなかったのに、この豹変ぶりは、どうも私の歳と無関係ではないらしい。今まで外の蝶ばかり追いかけていたのに、急に、これらの蝶に対する関心が薄れ、昔の蝶が蘇ってきた。これは、私が歳をとった証拠のようである。不思議な事にその事に何の抵抗もなかったのである。

正確には覚えていないが、1980年代になって、秋になると必ず川越や鶴ヶ島方面のウド畠に彷徨していたのである。残念ながら、少年時代の浦和周辺にはウド畠は残っていなかったのである。

秋のウド畠は相変わらず蝶の宝庫であったが、蝶の内容が一変していた。イチモンジセセリとオオチャバネセセリが圧倒的に多く、キタテハも多い。しかし、ヒョウモン類は滅多に見られなかつた。一日歩いて、2~3頭のヒョウモン類の姿が見られれば満足しなければならない状況であった。

ヒョウモン類はオオウラギンスジヒョウモンが大部分で、わずかにミドリヒョウモンが散見される程度であった。ついに、この10年間、ウラギンヒョウモンの姿を見ることはできなかつた。同時に、昔多かつた、ウラギンスジヒョウモンの姿も又見ることはできなかつた。

メスグロヒョウモンは別の場所で見られた。特に多かったのは嵐山の丘陵地のオカトラノオの花で、メスがかなり見られたが、平野部のウド畠では一度もメスの姿は見られなかつた。メスグロヒョウモンのオスを見たのは、1989年、江南町のソバ畠の花で傷んだ1頭を採集したにとどまっている。

時には、秋に大発生?すること(1984年・埼玉昆虫談話会)もあるが、相対的にヒョウモン類は減少しているのではないかと思う。

ただ、この蝶には不思議な現象がある。突然、平野部で大発生する事があるらしい。先に述べた1984年秋の記録がそうだが、――残念な事に、その年の初夏の発生消長の記録が不明である。

私の経験では、1988年6月~7月が小規模ながらそれに該当するようだ。この年は、新鮮なヒョウモン類を求め、武藏野の雑木林を彷徨していた。

市野川の堤防で新鮮なオオウラギンスジヒョウモンを採集した。翌週、再び訪れてみると数多くのオオウラギンスジヒョウモンが舞っていた。採集したのは僅か3♂であったが、目撃は多数であった。今度はミドリヒョウモンを求めて(内心はウラギンヒョウモン)高根カントリークラブ(高根CC)の雑木林にむかつたが、ここでもヒョウモン類はすべてオオウラギンスジであった。わずかに帰りがけに、メスグロヒョウモンの新鮮なメスを採集したが、目的のミドリヒョウモン、ウラギンヒョウモンの姿は見られなかつた。ミドリヒョウモンは1985年、ここで7月上旬にオカトラノオの花に群がっているのを目撃しているので、ミドリヒョウモンは確実に採集できると考えていたが、残念ながら空振りにおわってしまった。

この10年間で平野部のヒョウモン類は、オオウラギンスジヒョウモンが確実に個体数が増加しているのは間違いない。反面、ウラギンスジヒョウモンは完全に姿を消してしまったのは何故だろう。この30年間に両者の間で大きな勢力の交替があったのであろうか。データ不足の現状ではこの間の事情を解明するすべもない。残念な事である。

メスグロヒョウモンは個体数は少ないながら確実に棲息しているようだ。ただ、この蝶は平野部というより、丘陵部に勢力を移しているような気がする。ウラギンヒョウモンは10年間、平野部での棲息は確認できなかった。その棲息に最も関心をもっていただけに残念な気持ちである。この蝶は全国的にみれば平野部にも棲息しているいわば平凡な蝶であるが、少なくとも武蔵野の生活には向いていない蝶かもしれない。しかし、私はまだ希望を捨ててはいない。武蔵野のどこかに、きっとこの蝶は生活の場をしっかりともっていると信じている。ただ、誤解のないように言っておくが、私の対象は、武蔵野の平野部である。低山地でのウラギンヒョウモンの記録は承知している。標高50米内外の平野部での本種の棲息を求めている訳である。

オオウラギンヒョウモンについては絶望である。この蝶は1980年代、全国的に幻化した謎の蝶である。今や全国的蝶愛好家の垂涎の的の蝶であるので、武蔵野の平野部については棲息していたという事実はすでに歴史的なものであろう。

私にとって、良く解らないのが、クモガタヒョウモンである。この蝶が武蔵野の蝶なのかどうか、判断する材料を持ち合わせていない。平野部に棲息できる蝶なので、可能性は十分にあると考えるが、この蝶に関しての経験がないのでここでは割愛しておく。将来、復活する可能性はある蝶である。

#### ヒョウモン類の調査記録

##### 旧記録

1952-7-6	ミドリヒョウモン	1♂	浦和市秋ヶ瀬
1953-7-7	オオウラギンヒョウモン	1♂	同上
1953-9-24	ウラギンヒョウモン	4♀	浦和市太田窪
	メスグロヒョウモン	♀(目撃)	同上

##### 1980年代の記録

1980-9-14	オオウラギンスジヒョウモン	2♀	鶴ヶ島市郊外
1984-9-24	同上	1♀	吉見町市野川
1986-10-4	同上	2♀	鶴ヶ島市郊外
1987-9-15	同上	1♂	吉見町市野川
1987-10-3	同上	1♀	同上
	同上	1♀	鶴ヶ島市郊外
1988-6-18	同上	1♂	吉見町市野川
1988-6-24	同上	3♂	同上
		10♂(目撃)	同上
1988-7-9	同上	5♂(目撃)	高根cc
1985-7-12	ミドリヒョウモン	7♂(目撃)	高根cc
1987-9-15	同上	1♂	吉見町市野川
1987-10-3	同上	1♀	鶴ヶ島市郊外
1988-7-9	メスグロヒョウモン	1♀	高根cc
1989-9-30	同上	1♂	江南町八幡神社

## その5 キマダラセセリ

キマダラセセリは武蔵野の林縁によく見かけたという。私自身、この蝶について記憶がはっきりしていない。昔、この蝶を採集したような記憶はあるが、それが、少年時代の浦和市周辺であったか、それとも他の場所であったか記憶が定かでなかった。要するに、記憶に残るような印象深い蝶ではないのである。

元来、セセリチョウの仲間は地味で人気のある蝶ではない。強いて言えば、ギンイチモンジセセリかミヤマセセリ位のものであろう。キマダラセセリなんて誰も見向きする蝶ではないのだ。私の標本箱に残っているのは、長野県追分産の2頭と熊本県産の1頭のわずか3頭のみである。

キマダラセセリを平野部でみたのは、1986年、横浜市程ヶ谷の高台であった。この場所を平野部と呼ぶのはいさか抵抗があるが、都市部という概念には当てはまる場所である。この時、キマダラセセリに関心を持ったのである。

『埼玉の蝶』では、平野部にも棲息していると記載されており、知らなかつたのは私だけであったのだ。1987年6月21日、我が家の近くの鳴川の雑木林の林縁で、初めて本種を採集して、この蝶が平野部の蝶である事を確認したのである。

しかし、疑問もあった。この蝶が武蔵野の林縁部に昔から多産していたならば、いくらなんでも私の記憶には残っていたはずである。しかも、6月であるならば、連日、ネットを持って、雑木林を駆けまわっていた時期である。それでもこの蝶に記憶が残っていない。居なかつたとはいえなくとも、個体数が少ない蝶であったといえるだろう。

キマダラセセリが武蔵野から消えていく蝶であるのか、残念ながら私には判断できない。ただ、私の感覚ではこの蝶との出会いが武蔵野では記憶にない程であったので、武蔵野から滅びゆく蝶のリストに乗せたのである。従って、多分に、私の独断と偏見があることを許して欲しい。

1988年、市野川でヒョウモンを追っていた時、クサフジの花にこの蝶が遊んでいるのを発見した。翌週、再び訪れてみると、土手のクサフジにキマダラセセリが群がっていたのである。この蝶を一度にこんなに見たのは、初めての経験であった。最後に見たのは7月9日、高根ccの雑木林でオカトラノオの花にきていたのを目撃している。約3週間の成虫期間であった。

キマダラセセリは私が考えていた以上に、平野部にしっかりと腰をおろしていたのである。それともこの市野川が秘密の場所にふさわしく、この蝶にとってもここがパラダイスであったのかもしれない。どうも、市野川が私を別世界に導いてくれるような気がしてならない。ここには、ウラゴマダラシジミもオオウラギンスジヒョウモンもテングチョウもコムラサキも棲息している。これでオオムラサキも棲息していれば、40年前の秋ヶ瀬の再現である。

私の感傷が、普通の平野部に棲息するキマダラセセリを特別扱いしているのかもしれなかった。

### キマダラセセリの調査記録

大宮市奈良町	1987年6月21日	1♂
吉見町市野川	1988年6月18日	1♂ 1♀
同上	6月26日	1♂ 2♀ 目撃多数
同上	7月3日	1♂ 目撃数頭
高根カントリー	7月9日	目撃数頭(汚染個体)

## その6 ミヤマセセリ

1950年代は、この蝶はどこの雑木林にもいた普通の蝶であった。だから、当時からこの蝶に関心をもっていた虫屋はいなかったであろう。この蝶が武蔵野の雑木林から次第に姿を消していったのも誰も気がつかなかった。1970年代になって、他の蝶が武蔵野の雑木林から姿を消して人々の関心を呼んだ時も、まだこの蝶の消長に注目した人々は少なかった。

ミヤマセセリの消長が注目されはじめたのは、1980年代になってからではなかろうか。あるいは、1970年代の後半にミヤマセセリの消長に関心を持った人がいたかもしれないが、少なくとも、ミヤマセセリについて、組織的に発生の消長を武蔵野で調査したという話は1970年代には聞いていない。

ミヤマセセリはどこにでもいたごくふれた普通のセセリチョウであったので、人々の関心のないまま、だんだんに姿を消していったのではなかろうか。私とミヤマセセリの出会いはたぶん、1949年の浦和市の蓮昌寺の雑木林であったと思うが、記憶が定かではない。出会いといえる程、この蝶は印象的な蝶ではない。何気なくネットにいれて、2～3頭標本にして、それでおしまいの蝶であったのだ。いわゆる地味の代表的な蝶であった。

この蝶がいつ頃、平野部の雑木林から姿を消したのか。それは何故なのか。誰にも解らないことである。いつだったか、原聖樹君が雑誌の対談で触れていたが、彼もミヤマセセリの姿を消した本当の原因は解っていないようだ。それは当然かも知れない。ここ何十年も無視されてきた蝶の消えゆく姿を正確に推定できるわけがない。ミヤマセセリにとってはそれでいいのだ。

滅亡する間際になって初めて注目されてもこの蝶にとっては迷惑だろう。

ミヤマセセリという蝶はそんな地味な蝶なのである。

×      ×      ×      ×      ×      ×      ×

私がこの蝶に関心を持ったのはごく最近のことである。従って、『失われた平野部の蝶』という課題に関して、少なくとも私はこの蝶について語る資格はない。この蝶の滅亡の消長を克明に追っている人がいるならば、私は喜んで筆を降ろさねばならない。

私とミヤマセセリとの関係は実は、武蔵野ではなく、ギフチョウの住む山里での出会いがほとんどであった。

私とギフチョウの関係はすでに延べ30年になる。毎年、春になると私はギフチョウを求めて、全国を放浪の旅にでる。その時、ギフチョウと共に付き合いしてくれるのが、ツマキチョウでありミヤマセセリであったのである。

従って、私の辞書にはミヤマセセリの滅亡という文字は存在していなかったのである。武蔵野にはギフチョウは棲息していない。だから、この時期、私は武蔵野を彷徨することはなかったし、ミヤマセセリの消長に关心がなかったのである。ギフチョウの棲息している山里には、現在もミヤマセセリは生存しているのが常だったので、この蝶の動向がこんな状況になっているとは考えもしなかったのである。

1980年後半、ある人から、武蔵野の大宮台地からミヤマセセリが消えたようだと聞いた。それを裏付けるように、小堀さんから北本の石戸宿でミヤマセセリを撮影したのが最後のようとの話を聞いた。冗談じゃない。普通種のミヤマセセリが消えたなんて。まだ武蔵野の雑木林はわずかでも残っているではないか。私の知らぬ間にミヤマセセリが消えた。今まで何の関心も持ていなかったくせに、猛烈に腹が立ってきた。身勝手な話ではあるが。

1989年4月1日、私は北本の石戸宿に車を向けた。本来は、この日はギフチョウの研究で家を明けられなかったのであるが、この事実の確認の方が自分には大切に思われたのである。

実は、もう一種の春の蝶も関心があったのである。コツバメであった。この蝶は以前から気になっていた蝶であったが、ギフチョウとバッティングする為調査ができなかつたのであった。

この日は快晴無風の絶好の採集日和だったので、期待していた。石戸宿の遊歩道には散策する人が多く、ネットを出すのものはばかれたが、芽吹き前のコナラやクヌギ林の林縁を歩きながら、ミヤマセセリを狙ったが、全く姿は見ることなく終わった。林の中で1頭のシジミがとびだした。瞬間にコツバメだと思った。夢中でネットに入れてみたら、何とトラフシジミだった。しかも完品である。4月1日にトラフシジミを採集できたのだから嬉しいはずであるが、目指すコツバメではなかったので、失望したのを覚えている。

石戸宿でミヤマセセリに完敗したので、対岸の吉見の八丁湖に転戦した。ここにはミヤマセセリが現在も棲息していると聞いていたからであったが、到着してみると、人の波である。駐車場も満員。まるで観光地だ。絶望的な気分で遊歩道を歩いていくと、前方に黒い蝶影が横切った。ミヤマセセリだ。このごった返す人の波の中、ミヤマセセリは悠々と春を満喫していた。

人波から離れ、山道にくるとミヤマセセリの数も多くなり、幾つかの個体をネットに入れることができた。ミヤマセセリをネットインしてこんな幸福な気分を味わえるなんて、経験のなかったことだ。ここが武蔵野である事はまちがいないが、少なくとも平地ではない。完全な丘陵地である。しかし、コナラやクヌギの状況を見ても武蔵野の平地林と何等変わりがない。原君がいうようなコナラやクヌギのヒコバエの状況も石戸宿の雑木林の状況と変わりがない。

何故、石戸宿にはミヤマセセリが消えていて、環境もあまり変わりがない八丁湖には多数のミヤマセセリが生存しているのであろうか。両地域は10キロも離れていないのだ。

やはり、ミヤマセセリは謎の蝶だ。謎につつまれて消えていくのも、この蝶にふさわしいのかもしれない。

武蔵野の雑木林にはまだミヤマセセリが残っている地域が多々あるはずである。しかし、いずれ、これらの地域からもミヤマセセリは消えていくだろう。それらの地域でのミヤマセセリの今後の消長を記録していくのも、武蔵野の為には大切なことではないかと思う。

#### ミヤマセセリの調査記録

北本市石戸宿	1989年4月1日	発見せず
吉見町八丁湖	1989年4月1日	1♂ 1♀ 目撃多数

#### その7 ジャノメチョウ

この蝶は不思議な蝶である。7~8月の高原に行けば、目につく蝶はジャノメチョウばかりである。その位、高原では個体数の多い蝶で、とても滅びゆく蝶のイメージはない。特に、長野県の各地の夏はうんざりする位、この蝶で満ち溢れているのが常である。昔も結構多かったが、近年、更に個体数が増加した感がある。

少年時代には、浦和市の雑木林の林縁部の草地にはジャノメチョウが常に見られたものである。蓮昌寺の裏山には必ず姿がみられ、はっきりと記憶している。この蝶は高原ではなくさる程とんでいるのに、

平野部ではかなり前から姿がみられなくなっていた。この蝶はミヤマセセリとは別に、私自身かなり存在を意識していた蝶である。

この蝶が平野部から姿を消したのはいつ頃かは定かではない。あるいは、現在でも生存しているかもしれない。この蝶も地味な蝶である故か、その消長について、明確に調査している人は少ないようである。もっとも、ジャノメチョウの発生消長を克明に記録して、発表したとしても、どれだけの人達が注目するだろうか。全国的規模で減少している蝶であればともかく、高原にはくさる程とんでいる蝶なのだから、極めて注目度の低い蝶であることは間違いない。この蝶も武藏野から姿を消しつつあるのだ。誰からも注目されずに、いつの間にかいなくなっていた。そんな蝶である。

ジャノメチョウは年1回、7月に発生する。平野部では猛暑の季節で蝶にとっては端境期である。誰も猛暑の中、端境期の蝶を採集には行かない。この時期は長野県、山梨県の山岳、高原地帯は蝶のパラダイスなのだ。多くの虫屋は山へ山へと押しかけ平野部など見向きもしないのが常である。少数の地元の蝶研究者が年寄(失礼)が平野部で汗をかいてネットを振っているに過ぎない。平野部のジャノメチョウはそんなエアポケットにはいった蝶なので、平野部の実態がよく解っていない。

私が平野部のジャノメチョウを追いかいたのが、1988年だから、ごく最近のことである。夏の山岳、高原への遠征に飽きて(実際は疲れて)年寄りの仲間入りした結果かもしれない。しかし、身近に目を向けると結構楽しい。高原のジャノメチョウならネットも振らず見向きもしないが、平野部のジャノメチョウは一生懸命追いかける。同じジャノメチョウなのに、この相違は何だろう。普通種でも所変われば品変わるのである。

1988年7月9日、高根ccの草原で黒いジャノメチョウを発見した時、息を切らして追いかけた。広島でのヒョウモンモドキは追いかけもしなかった。そして、ネットにいれた時の嬉しさは忘れない。不思議なものである。

7月23日、江南町の平地林に到着早々ジャノメチョウの出迎えをうけた。喜んでネットにいれたのはいうまでもなかった。この林は遠い昔の蓮昌寺を思い起こし、タイムカプセルに乗った気分であった。

同じ日、吉見丘陵のグランドの一角で、ジャノメチョウの群飛を目撃した。長野県の高原での光景を彷彿させるに十分であった。こんな場所にジャノメチョウが多数舞っている。夢のような出来事であった。平野部で消えてしまったのは私の思い違いではなかったか。数頭の蝶をネットインして、後はのんびりと眺めていた。

1989年はこの場所で僅か2♂見たのみであった。しかも前年と同日である。あの乱舞はどこに消えてしまったのだろうか。そういえば、この年は他の場所では一度もジャノメチョウの姿は見なかった。

1990年はジャノメチョウは一度もネットを振らなかった。しかし、最初に採集した高根ccの雑木林には多数群がっていたのを目撃している。

しかし、大宮台地では姿を見ることはなかった。本当に大宮台地からは姿を消してしまったのである。今後、調査の重点をこちらに移してみよう。

#### ジャノメチョウの調査記録

##### 高根カントリー

1988年7月9日 1♂

江南町八幡神社付近

1990年7月17日 多数目撃

1988年7月23日 1♂  
吉見町大沼上グランド  
1988年7月23日 3♂ 2♀ 目撃多数 1989年7月23日 2♂ (小破損)

### その8 ホソバセセリ

この蝶が武蔵野の雑木林に棲息しているとは、つい最近まで考えても見なかった。元来、地味な蝶であまり注目されていなかったので、今まで隠れた存在であったのかもしれない。

1951年に発行された幻の名著、林慶氏の『日本蝶類解説』には本種について以下のような記載がある。  
“九州、四国、近畿等の暖地に多く、関東地方南部にも普通である。(中略) 東京近傍では、6月下旬より7月初めに出現し、8月後半に度々新しい個体を見る。恐らく暖地では2回発生するものと思われる”-----以下 略”

林さんの“東京近傍”がどのあたりを指すのか明確ではないが、武蔵野の雑木林に棲息していた事は間違いないと思われる。伊藤・原氏の『神奈川の蝶』には横浜、川崎、三浦半島に棲息していることが記載されており、林さんの記載を裏付けている。では問題の武蔵野にはホソバセセリが棲息しているかといえば、これがはっきりしない。『埼玉の蝶』では、---“主な棲息地は低山地で、下限は海拔200米前後、上限は1000米程度”との記載で、武蔵野の平野部では記録されていない。ただ、1944年発行された織田一磨氏の『武蔵野の蝶』にはホソバセセリのリストが記載されているので、武蔵野の東京寄りには棲息していたと推定される。従って、ホソバセセリも武蔵野の蝶であった。

1980年代になって、ホソバセセリに関して、いくつかの新知見が発表された。そのひとつは、牧林さんの所沢市の狭山丘陵の『早稲田大学建設予定地』での昆虫調査で、ホソバセセリの生存が確認された事。もう一つは、加藤靖治さんが埼玉県北本市石戸宿(標高30メートル)でホソバセセリの撮影に成功していることである。ホソバセセリが武蔵野の住人であることがこれで確認された。この蝶が昔から武蔵野の住人であったのか、最近、移住してきた新参者なのかは確認できないが、少なくとも織田氏の時代から40年以上も武蔵野で生活していたことは事実である。

1989年は、武蔵野の蝶の探索のターゲットをホソバセセリにおいたのである。調査場所は吉見町であった。ここに間違いなく棲息しているはずであった。

1989年7月22日、いつものように、吉見にクロヒカゲの調査にでかけた。目的は写真撮影で、日吉神社でコジャノメ、大沼でクロヒカゲの写真撮影に成功して、気分良く和名沼の雑木林に向かった。林の中ではクロヒカゲ、ダイミョウセセリ、キチョウ、スジグロシロチョウ等が暑い日差しを避け、休んでいた。これらの蝶をカメラに収め、林を出ると、林縁部に咲いていたオカトラノオに見慣れない蝶が吸蜜していた。近寄ってみるとホソバセセリではないか。

目標にしていた蝶ではあったが、いざ眼前に姿を現すと年がいもなく動搖してしまう。ネットが先かカメラが先か、しばし葛藤が続く。カメラが勝ち、ふるえる手で何枚かシャッターを切り、その後ネットインさせた。結果的にはこれがよかったです。何故ならば、この時に限って、カメラが故障してフィルムが回転しなかったのである。ネットインしなかったならば、ホソバセセリの記録も私の胸の中だけで終わってしまったからである。

翌週、再び和名沼にでかけた。ホソバセセリが目的であった。オカトラノオの花は終わってしまった

が、ホソバセセリは再び姿を現したのである。今度は間違いなくカメラに収め、今年の課題の一つが解決したのである。ホソバセセリは標高20米の武蔵野の雑木林に棲息していたのである。恐らく武蔵野での最も低標高の記録であろう。

### ホソバセセリの調査記録

吉見町和名沼

1989年7月22日 1♂

同年7月30日 1♀

### その9 ヒメキマダラセセリ

この蝶が武蔵野の蝶というには抵抗があるかもしれない。私自身、この蝶を武蔵野の蝶と考えていなかった。私の考えでは、ヒメキマダラセセリは完全な山の蝶である。過去の採集記録を見ても、ヒメキマダラセセリはすべて山地での採集であった。この蝶が平野部の蝶であるなんて全く考えられなかった。

当然、私の少年時代の記憶には、この蝶は登場していない。むしろ、長野県の高原地帯でこの蝶と数多く接していた。私の記憶では、高尾山が最も低い産地であった。従って、ヒメキマダラセセリは山の蝶で、断じて平野部の蝶ではない。そう確信していたのである。

『埼玉の蝶』では次のように記載されていた。“中間温帯林（低山地）が主棲息地で、ホソバセセリの分布域とほぼ一致するが、本種の方が普遍的で各地に多産し、分布の下限は海拔200米前後で、今の所八高線以東の低地からは未知。（中略）上限は1000米前後と思われる”

ヒメキマダラセセリは私が考えていたより、低地に棲息地が多いようで、何よりもショックだったのはホソバセセリと分布域が一致しているとの事であった。山の蝶と思い込んでいた私にとって、この記載は衝撃的でさえあった。

『ヒメキマダラセセリは里の蝶だったのか。それなら武蔵野の蝶なのかもしれない。否、間違いなく武蔵野の蝶なのだ。』

しかし、先の織田氏の『武蔵野の蝶』にも本種のリストはない。何故、私がこの蝶に『こだわる』かといえば、セセリチョウの中で最も好きな蝶であったし、山でいつもこの蝶の出迎えを受けた懐かしい記憶があったからである。だから、私は、この蝶を山の蝶と思い込む習慣がいつの間にか出来上がっていったのである。その蝶が里の蝶だなんて。がっかりである。この時点でも、ヒメキマダラセセリが武蔵野の蝶とは考えもしなかったのである。私のイメージがそれを許さなかった。

1988年6月4日、市野川でウラゴマダラシジミの乱舞の夢を見た後、高根カントリーの雑木林に向かった。もし、ヒメキマダラセセリが武蔵野の蝶であるならば、この雑木林にいるはずである。一度もここで姿を見ていないのに、これは虫屋の勘である。

林の入口で車を止め、ネットを用意した時、眼前に赤いセセリチョウが飛んでいる。

あっけない程簡単にヒメキマダラセセリとご対面が出来たのである。ここで1頭採集すればもう結構だ。私のこの蝶への思い入れが見事に裏切られ、ヒメキマダラセセリは里の蝶に成り下がったのであった。本当の気持ちはこの蝶を採集して、ちっとも嬉しくなかったのである。

他の場所での調査をする気力もなかったのである。

時が経ち、再びヒメキマダラセセリが気になってきた。すでに一時の感傷は消えていた。この蝶がもつと低地に棲息していないだろうか。ちょうどクロヒカゲの場合と同様である。幸いヒメキマダラセセリ

は2回発生する。たぶん第2化の個体は8月中旬であろう。この蝶に対する意欲が沸いてきた。

8月18日、再び高根カントリーの林に来てみると、すでにメスが主体であったが数頭の個体を確認できた。今度は江南町の平地林に向かう。ここに棲息していれば、武蔵野の蝶である証拠がえられる。何故ならば、ここは標高50米足らずの完全な平地林であるからだ。林縁部の小道を注意しながら歩いたが、ヒメキマダラセセリの姿は見えない。やはり駄目かなと思いつつ、林の中に入ると、木漏れ日の中を赤いセセリチョウが舞っていた。新鮮なオスである。ここで4♂採集でき、ヒメキマダラセセリの棲息を確認したのである。

最後に寄ったのは標高20米の和名沼である。いつもの私の調査コースであった。林の中に入ると、傷んだコジャノメがいるばかりで、クロヒカゲの姿も見えない。やはり駄目かなと思いつつ、林の中を歩いていると、木漏れ日の当たっている下草にイチモンジセセリに混じって見慣れないセセリチョウが飛んでいる。何だろうとしばらく観察していたら、ボロボロのヒメキマダラセセリであった。あまりにも傷んでいたので、赤い色彩が消えて、よく解らなかったのである。更にここでもう1頭採集して、ヒメキマダラセセリも武蔵野の住人である事が確認されたのであった。

翌年はヒメキマダラセセリの撮影に全力を注いだ。やはり、生きた姿をカメラに収める為、和名沼の棲息地で満足できる数の撮影に成功したのである。

ミヤマセセリが武蔵野の住人であることは誰でも理解できるが、ヒメキマダラセセリも武蔵野の住人であるとは私自身確認するまで、信じられなかつたのであったが、間違いなく武蔵野の住人であったのである。

この蝶が『失われた平野部の蝶』なのか、新たに、平野部に進出してきた新参者なのかは残念ながら解らない。

#### ヒメキマダラセセリの調査記録

高根CC

1988-6-4 1♂	1988-8-18 2♂ 3♀	1989-8-9 1♂
-------------	-----------------	-------------

江南町八幡神社

1988-8-18 4♂
--------------

吉見町和名沼

1988-8-18 1♂ 1♀	1989-6-4 3♂ 1♀	1989-8-9 4♂ 1♀
-----------------	----------------	----------------

≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡ ≡≡

武蔵野の雑木林の崩壊によって、その住人である蝶達は大きな打撃を受けたのは事実である。完全に絶滅している蝶もいるかもしれない。しかし、このささいなレポートを読んで戴ければ、蝶達は苛酷な条件下でも実に逞しく生きている事がお解りいただいたと思う。

このレポートが蝶達の終焉の記録となるのか、はたまた、永遠に力強く生抜いていく姿なのか、現在の私には正確に判断できないが、今後、人間達が己のエゴの為に武蔵野の自然を破壊していくならば、蝶達の運命もおのずから決定されるであろう。

近年、環境破壊の問題がマスコミを通して極めて活発になってきた。結構な事ではあるが、そこに何か大切な要素が欠落したまま論議がなされているような気がする。それは、端的に言えば、人間のエゴである。この問題をタブーにして論議されている場合が非常に多い。蝶の世界から見れば、人間達のエ

ゴによってどれだけ環境が破壊され、棲息地を奪われ、滅亡していったか、本当に環境論者は考えたことがあるだろうか。

人間達が住む為には仕方がないという理論でどれだけ環境を破壊して、蝶を初め多くの昆虫、動物を滅亡に追い込んだか考えたことがあるだろうか。

武蔵野の雑木林の崩壊は正にこの端的な解答ではなかろうか。これだけ破壊して、今更、環境破壊は怪しからんとしたり顔で論じている人達の神経が理解できない。これは蝶達の世界からみた感想である。

蝶にとっては、現在、人間達が大問題にしているゴルフ場の方が遥かにましである。このレポートに登場するゴルフ場周辺の雑木林には『失われたはずの蝶』が逞しく生存している。しかし、住宅団地、工業団地、学校等の人間に密接に拘わりを持つ場に環境が変貌した場合、蝶達の生活の場は潰滅的である。

私自身、人間生活を営む一人であるから、この事を否定する考えは持っていないが、現在の武蔵野の破壊はどう見ても行過ぎのようである。しかし、いまさら過去に戻ることは不可能である。では、わずかに残された武蔵野の残影をこれ以上破壊しない方策を考えなければ、武蔵野は完全に消滅して、そこで生活していた虫達も永遠に姿を消すだろう。それもしかたないとするならば、それは人間達の奢りであり、いずれその報いが自分達に帰ってくることをしらなければならない。

今回、武蔵野の代表的な蝶——オオムラサキ——を敢えて割愛した。私にとってオオムラサキは1949年以来、武蔵野でなじんできた思いでの蝶である。有名な蝶だけにスポットを当てるのではなく、無名の蝶を取上げたかったのである。さらに武蔵野の代表的な蝶で人気のあるギンイチモンジセセリも割愛した。この蝶は現在でも荒川流域の河川敷で立派に生活している。この蝶については大島良美氏の『蝶と暮らして40年』に詳しく紹介されているので参考されるとよいだろう。

『武蔵野の蝶』でどうしても書きたかった蝶がいくつかある。代表的なものはコツバメでありミスジチョウである。これらの蝶は少なくとも私の調査期間内では消息が確認できなかった。絶滅したとは思いたくないが、絶滅の危機にひんしていることは間違いないだろう。特にミスジチョウは浦和駅から歩いて7分の自宅の庭で採集ができたなじみの蝶であったが、市街地からは姿を消したのはいつごろだったのだろうか。今となっては確かめようがない。

ついでに1950年代に平野部に棲息していて、その後の消息が分からない蝶についてふれてみよう。

まずオナガアゲハであるが、1952年5月3日に浦和市で採集しているが、その後平野部での消息は不明である。武蔵野の周辺の低山地では棲息しているが、平野部での確実な記録は知らない。

次にヒオドシチョウであるが、この蝶は1950年代は浦和市の雑木林にはどこにも棲息していた。この蝶も最近、平野部での消息は不明である。ただ、1980年、大宮公園で新鮮な個体を目撃しているので、絶滅したとは考えられないが、勇壮な姿を見ることが難しくなったのは淋しいかぎりである。

普通種ではアカタテハの姿も最近は見かけない。この蝶も絶滅はしていないと思われるが消息が気になる蝶である。

武蔵野の蝶のすべての消息は今後の課題として、第一部をこのあたりで終了することにしよう。

# 狭山丘陵のオオムラサキに関する問題点

石澤直也

狭山丘陵のオオムラサキについては、1985年に杉村健一氏が三ヶ島でのオオムラサキの目撃を、最近では中川利勝氏が、当丘陵地における採集・目撃記録と保護について寄せ蛾記にリポートされている。筆者は当地には1984年に引っ越ししてきたが、その年の11月の調査で当地にオオムラサキがいることを知った。このことについては、今まで一部の人しか話して来なかった。理由は、当地的開発もさることながら、絶滅したと思われていたオオムラサキの生存が知られるようになって、逆に乱獲されることを恐れたからである。筆者は“国蝶オオムラサキを守る会”に所属しているが、会でもこのことは伏せておく事が賢明という意見だった。従って、会報で他の地域のオオムラサキと比較をする場合、当地のものについては埼玉県平野部として記録することになった。

しかし、当三ヶ島で筆者が最初に目撃したオオムラサキの越冬幼虫については、生存地域が早稲田大学のキャンパス予定地内にあったため、翌春エノキは伐採され、他へ移されること無く埋め立てられてしまった。

86年秋に再度三ヶ島と堀之内地区を調査し、オオムラサキの生存を確認した。その時点で大学のキャンパス建設工事は予定地の西側（休耕田で湿地化した）の下調べに入っていたが、また何時埋め立てられるか分からぬので、ひとまず春まで自宅で保管しておくことにし、その間大きさや体重等の計測も行って、当地のオオムラサキの特徴などについて若干の知見を得たりした。また、調査地点も増やして、周辺に拡大し、その後も毎年秋の回収と翌春エノキの根元に戻すことを繰り返してきた。また、“国蝶オオムラサキを守る会”でも狭山丘陵全域の調査を実施し、ほぼ生存地点を確認した（この点の詳細については当然未発表になっている）。

しかし、各種の調査（当会ではオオムラサキの越冬幼虫調査だけではなく、夏場は樹液に集まる昆虫の24時間調査なども実施している。）を当地でやって行くに従い、地元の人との交流を通じてオオムラサキなどについての問題なども耳にするようになってきた。また、当地のオオムラサキについては、狭山丘陵見て歩きの中で神久保美津夫氏も触れており、これ以上隠しておく必要も無くなっている。従って、ここでは、今まで調査してきた当地のオオムラサキについて、その問題点や特徴などについてリポートすることにする。

## 1. 狹山丘陵のオオムラサキは須玉産か？

『埼玉蝶の世界』で、県内のオオムラサキは、昭和35年頃から低地や丘陵で姿を消し始め、今では八高線以東では殆ど絶滅したとある。しかし、既に述べたように当地で生存が確認され、筆者も含めてこれらが元からいたものなのについては余り吟味してはこなかった。

最近、瑞穂自然科学同好会の黒田美好氏に会い、当丘陵地内にオオムラサキを放蝶している人がいることを知らされた。東京都西多摩郡瑞穂町箱根ヶ崎で造園業を営んでいる吉岡秀郎氏で、氏に照会したところ、時々山梨県須玉町から成虫を採ってきて採卵して、植木畑の中のエノキで飼育し、夏場に六道

山周辺に放しているという。一回の放蝶数は100頭を超えるらしいが、目立つので殆どは野鳥の餌になってしまい、秋に付近のエノキの根元の幼虫を探しても数は多くないとのことだった。それで追加措置として須玉に出掛けては補充していたという。

畑に植えられているエノキでまだ若く、葉が大きくて柔らかいので幼虫の食い付きが良く、成虫は大型だとこのことで、このことは中川氏が採集した瑞穂町産の♂が大型だったことと一致している。するとこれは須玉産の個体と言えるかもしれない。中川氏が、91年3月に所沢市で発行された『所沢の自然』p. 172に載ったオオムラサキ成虫♂の写真から放蝶しているらしいことに言及されているが、この写真の個体は、実は筆者が前年の秋に回収した幼虫のうち3頭を飼育し、うち1頭を羽化させたものである。放蝶は90年6月17日、三ヶ島（正式には堀之内地区）で行われ、その際『所沢の自然』の写真を担当していた関谷宗次氏が撮影したもので、翅の斑紋は中川氏が三ヶ島勝樂寺産（地元の人に照会したが、勝樂寺という地名は三ヶ島には無いと言う。）としているものに似ている。（写真1. 参照－筆者撮影）

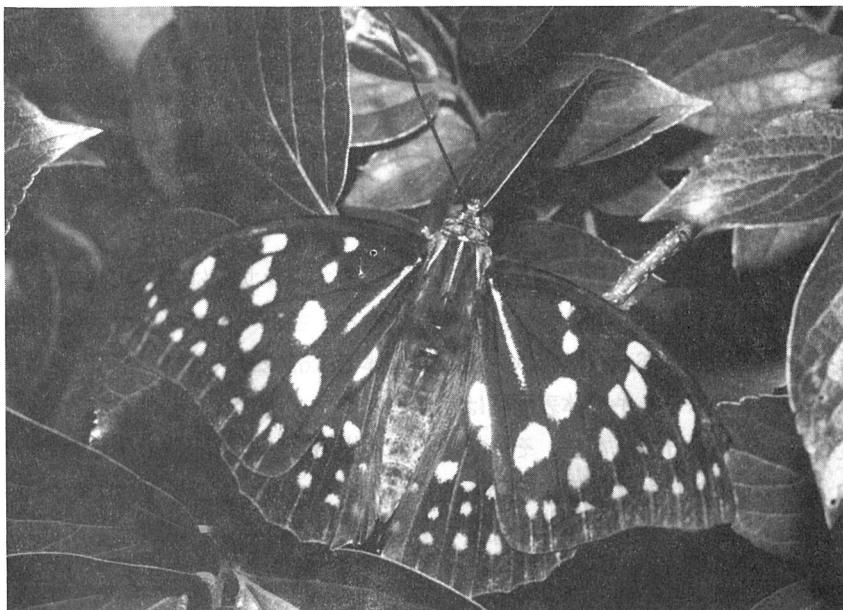


写真1. 『所沢の自然』に掲載された個体

この日には同所で別のオオムラサキ1頭を目撃している。これが吉岡氏が放蝶したものかどうかは分からぬ。オオムラサキの行動半径は茨城県友部町での調査では800mだったという。氏が放蝶する六道山周辺から現場までは約2.5km離れているので、距離的には遠すぎると思われる。するとこの個体は野生だった可能性が高い。しかし、オオムラサキの行動半径（5年間で4km）は大きいから、氏が長期間にわたって放蝶を続けていたと仮定すると、須玉産のオオムラサキは狭山湖側は勿論のこと、多摩湖側では狭山緑地にまでもう到達していると推定される。放蝶の時期と野生種の羽化時期とはそれ程違ひは無いようなので交雑は可能である。もし狭山丘陵のオオムラサキが絶滅しないで遺存していたら、既に交雑によって遺存種としての姿は無くなっている可能性がある。これについては、今後遺伝子レベルの検討が必要になると思われる。

## 2. オオムラサキの生息状況

山梨県須玉町産の血が混ざっているらしいとは言え、毎年越冬幼虫が見付かる事実は以前から細々ながらオオムラサキが生存していたことを裏付けていると言えよう。筆者は夏場のオオムラサキ成虫の調査は殆どやっていないが、越冬幼虫調査は85年秋を除いて毎年実施しているので、ここでは越冬幼虫からその生息状況について触ることにする。

調査は堀之内地区で、早稲田大学のキャンパス予定地の湿地帯北側とその外縁部で、エノキが落葉した11月下旬に実施している。調査はエノキの根元から凡そ50cmの範囲でおこなう。この範囲に越冬する幼虫数は当該エノキから降下した個体数の約80%に該当すると言われている。86年からの調査で1本のエノキの最多幼虫数は88年に記録した63頭で、通年の平均は11.7頭／本である。指標になる4本のエノキの越冬幼虫数は図-1に示してある。最近では89年の75頭をピークに、下降傾向にある。一般的に言ってオオムラサキが減少したときはゴマダラチョウの割合が増加する傾向があるようである。

ゴマダラチョウのオオムラサキとゴマダラチョウの合計に対する割合で見たゴマダラチョウ比率でオオムラサキとゴマダラチョウの関係をとらえたのが小林尚氏（まつむし No. 71, 1985）で、当地のゴマダラチョウ比率は通年で58.8%で、92年秋では68.7%とゴマダラチョウの割合が高くなっている。因みに長坂町の比率は3.6%，茨城県友部町では19.1%，長野県松本平では45.6%である。自然度が良いほどゴマダラチョウ比率が低下しており、これから見ると狭山丘陵では比率が高く、オオムラサキの生息環境は悪いと言えよう。

環境が悪くなるとオオムラサキが減少する理由は、まずオオムラサキは年1化（ゴマダラチョウは年2化）で不利といえる。また、越冬個体の体重を比較すると、当地のゴマダラチョウの平均は138mgに対し、オオムラサキの平均は78.6mg（86年秋、長坂の個体では63.2mg）とゴマダラチョウの半分位である。体重が軽く小型のオオムラサキの体表面積は相対的にゴマダラチョウよりも大きく、その分越冬の際乾燥や温度変化の影響を受け易くなる。その為越冬する場所は、温度変化の少ない北側や西側で、オオムラサキの方が適度の湿気があり地面に近い所の葉裏に多く、ゴマダラチョウではかなり表面に近い所の葉裏に多く見受けられる。オオムラサキは余り多湿の所は避けるが、乾燥する所にも少ないのでこの為と言える。

従って、オオムラサキの越冬幼虫の多少は、気象条件は別としてエノキの生えている場所により、乾燥する南向きの斜面や稜線沿いの所では少なく、北向き斜面や沢沿いでは多くなる傾向がある。現在当地では北向きの沢沿いの地点のエノキが少なく、乾燥気味の所が多いのが問題である。

## 3. 越冬幼虫の特徴

乾燥気味の所では大型の越冬幼虫が有利になる訳だが、当地の幼虫は一体何令で越冬するのだろうか。令数の割り出しあは、本来なら飼育によってきちんとデータを探るべきであるが、統計的に把握する事ができるので、ここでは、国蝶オオムラサキを守る会が長坂町でやった方式を採用してみた。秋に回収した幼虫の頭幅を計測して、頭幅を基準にしてヒストグラムを作る。

頭幅は年によって変化するが、当地の場合86～89年の平均頭幅は2.5～2.7mmとそれ程大きくは変わらなかった。図-2は86年と88年のデータを比較したものである。両者とも山は一つで殆どは4令であると推定される。それでも小さいものは3令の可能性があるから、強いて推定すれば頭幅2.2～2.4mmが3令と思われ、その割合は5.2%，9.7%と小さい。87年と89年では夫々25.6%，29.3%と大きくなっている。

図-1 オオムラサキ越冬幼虫数の推移  
(標本エノキ4本の合計数)

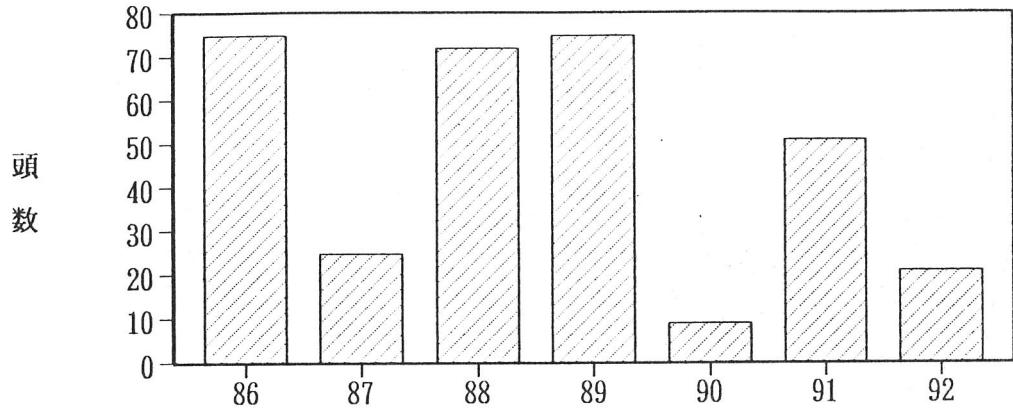
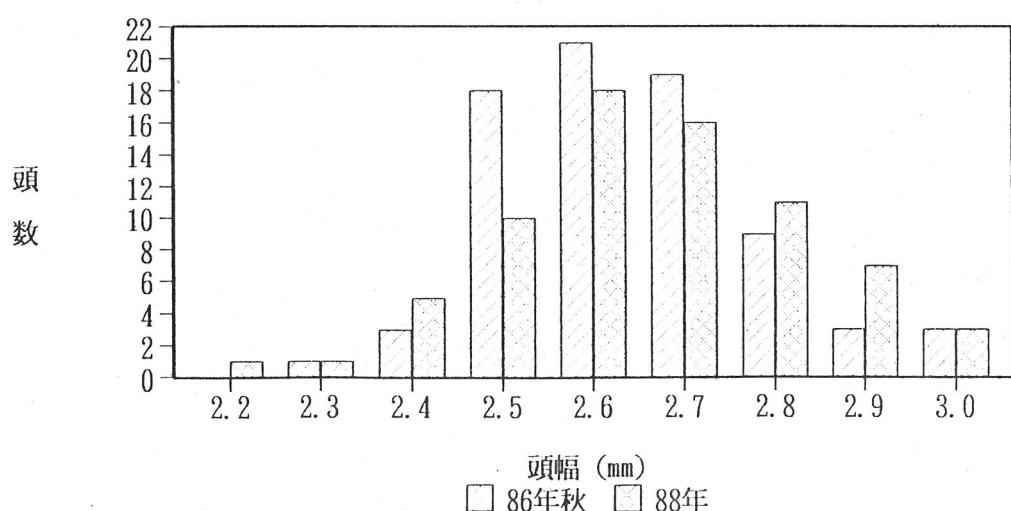


図-1 用データ  
オオムラサキの幼虫数の推移  
年 頭数

86	75
87	25
88	72
89	75
90	9
91	51
92	21

頭幅	86年	88年
2.2	2	1
2.3	1	1
2.4	3	5
2.5	18	18
2.6	18	21
2.7	19	16
2.8	9	11
2.9	3	7
3.0	3	3

図-2 オオムラサキ越冬幼虫の頭幅分布



いるが、概ね5~30%が3令越冬と思われる。

また、大きい個体では84年11月23日と86年11月23日に三ヶ島と堀之内で夫々採集したもので、体長が20mmを超える物があった。当地の越冬幼虫の平均体長は約16mmであるから、これらの個体はかなり大きく、ゴマダラチョウと比較しても遜色はなかった。86年のもの(写真2)は体重が130mgとゴマダラチョウと同じ位であり、84年のもの(写真3)は、以前、埼玉昆虫談話会の市川氏に照会したもので、当初はオオムラサキではないのでは、と物議を醸したものである。これと同じ位のものは89年の秋にも見られ、頭幅が2.8mm、体重は128mgあった。しかし、これらの個体は概して弱く、越冬の途中で死亡している。体色は幼虫が春眠起して脱皮する直前の灰色がかかった褐色をしていたから、多分5令直前で越冬に入った個体なのではないかと思われる。

#### 4. オオムラサキの保護の問題

以上狭山丘陵のオオムラサキについて述べてきたが、遺存種としての問題や、生息環境の悪化の問題など、保護していく面で様々な問題が生じている。

中川氏が大筋においては当地の環境は問題ないと指摘しているが、それは甘いと言わざるを得ない。最近は樹液を出すクヌギやコナラは殆ど見当たらない。オオムラサキやカブトムシなどは高い梢の部分の若い枝の部分で吸汁しており、それもスズメバチやカミキリムシ等が齧った後に群がっている有様である。樹液を出さなくなったのは樹が老齢化したからとも言えるが、そのほかに酸性雨の影響もあるようである。

山梨県の長坂町でも最近は余程のことでもない限り樹液を出している樹は見付からなくなった。ここも中央高速道路が開通してからは、年々樹液を出す台木が減ってきてている。餌不足になれば当然虫は減る。昆虫の世界にも酸性雨の害は及んでいると言える。

従って、オオムラサキが当地に細々ながら生息しているのは、環境の悪化した中でぎりぎりの所で生存しているということで、僅か1haの土地を自治体が買い上げたからと言って、オオムラサキの生息環境が確保されたとは言えないである。

ある地主は嘆いていた。山林に手間隙かけてもその費用は誰も出してくれないと。ましてや人の土地に無断で入って来て、産業廃棄物やゴミを投げ捨てるもの、傍若無人に虫や草花を採集していく輩を見れば腹も立とう。いっそのこと売り払ってしまえと。

我々が当地でオオムラサキを見ることが出来るのも、地主が自分の山林に手を付けないからだと言える。また、昔のように手入れがされないために、オオムラサキを始めとした昆虫達の世界を狭めていることにもなっているが、これを打開するための方策は余りにも問題が大きく一人の人間で解決出来る事ではない。従って当地に採集や観察に来る人は、今後こうすることも考えて行動することが必要だし、環境改善のために様々なことに手を尽くしていく義務があると思う。

放蝶については、個人の問題なので、余り強く咎め立ては出来ないので、筆者が堀之内で実施しているような回収による保護でも有効であることを本人に分かって貰うしかないと思われる。今まで毎年幼虫が確認できたのは放蝶により越冬幼虫が補充されていたからだと言えるかもしれないが、放蝶場所からかなり隔たったところでも、毎年それなりの頭数が数えられている事から判断すれば、放蝶はやらなくても、現状は維持出来ると思われる。ただ、量的に少ないので乱獲されれば絶滅は早いから、出来るだけ回収による保護は続ける必要はある。

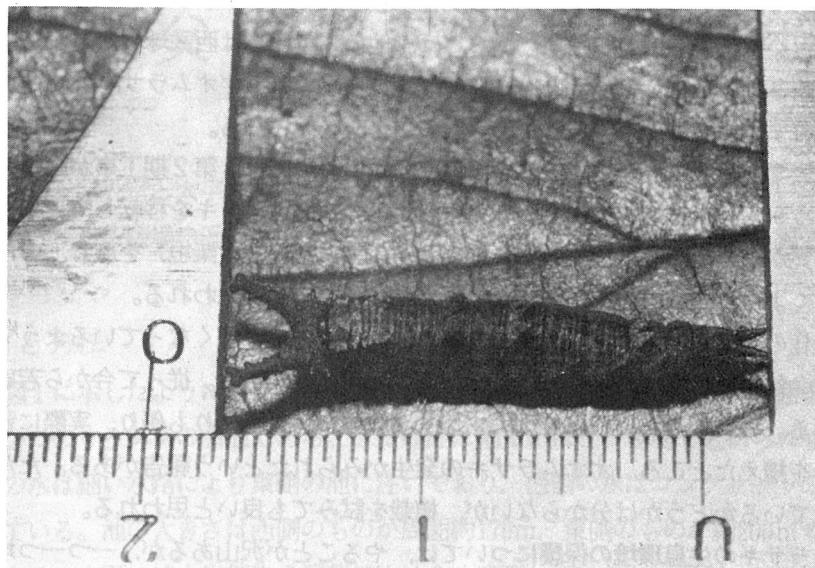


写真2. 1986年11月23日に採集された個体



写真3. 1984年11月23日に採集された個体

特に狭山丘陵の東端に位置する所沢市上山口地区（隣接する東村山市の北山公園にもエノキ林はあるが、ここでは越冬幼虫は確認されなかった。）には現在少数ながらオオムラサキが生息している（88年2月28日に菩提樹池近くで越冬幼虫1頭確認）。ここは、他の丘陵部とは西武球場・ゴルフ場や各種の遊戯施設によって分断されて孤立しているところなので、現在みられるオオムラサキは、ひょっとして当地の遺存種かもしれません、今後はできるだけ生息環境の改善が必要となる。

また、現在早稲田大学キャンパス予定地内のオオムラサキについては、第2期工事が始まれば、エノキは伐採されるだろうから、大学当局に働きかけて、予定地の南側にエノキを移転して貰うことも必要だろう。その際、根元が吹き曝しにならないよう、周囲1m位に低い柵（柴垣）を施し、中にはジャノヒゲなどを植えて置くようにすれば、越冬幼虫の保護には極めて有効と思われる。

また、最近は温暖化の傾向がみえ、乾燥が進んでいて、エノキの葉が硬くなっているようである。葉が硬いと、夏場の弱令幼虫には堪え、その分発育は悪くなる可能性がある。従って今から若いエノキを植えて置く必要もある。葉が柔らかいことではエゾエノキの方がエノキよりも優り、実際に青森県十和田市ではエゾエノキを植えたところ、オオムラサキの発生がみられたという報告がある。ただし、エゾエノキが当地に適しているかどうかは分からないが、植栽を試みても良いと思われる。

このようにオオムラサキの生息環境の保護については、やることが沢山あるが、一つ一つ地道に実行していくかなくてはならない。これらは、単にオオムラサキだけの為にあるのではなく、オオムラサキと生息環境を共有する他の生き物にとっても有益である。

また、当地に限らず、生き物自体の生息数が開発や他の要因による環境の悪化の為に少なくなっているのだから、レッドデータブック記載以外の種でも、特に少なくなっている種については単なる趣味的な採集は遠慮してもらわ必要もこれからは生じてこよう。筆者も標本は作っているが、必要最低限の数に限定しているし、個人の所有物とする積もりはない。標本を寄贈しても取扱いが悪ければ標本が損なわれるとして、寄贈を拒否する人もいるだろうが、所詮個人の標本は本人一代限りであり、いずれは朽ちてしまるものである。大英博物館のように毎年相当数の標本を購入したり、寄贈を受けたりして、それらを厳重に整理保管しているところもある。日本には未だこうした施設は少なく、最近できた兵庫県立人と自然の博物館や徳島県立博物館位しかない有様である。

従って今後はこういう施設を増やすよう関係機関に絶えず働き掛けを行うことが必要である。

#### [参考文献]

- 埼玉昆虫談話会（1984） 埼玉蝶の世界、埼玉新聞社、106-107.
- 杉村 健一（1986） 1985年の狭山丘陵の蝶、寄せ蛾記 46：649.
- 蟻川 謙太郎（1986） 調査会報告（幼虫調査について）、雑木林からの便り、4：5.
- 国蝶オオムラサキを守る会（1987） 86年冬の越冬幼虫調査会の報告、雑木林からの便り、7：11-14.
- 神久保 美津夫（1990） 狹山丘陵の蝶、狭山丘陵見て歩き、幹書房、p. 29.
- 国蝶オオムラサキを守る会（1991） 91年春の越冬幼虫調査会の報告、雑木林からの便り、15：6-7, 13.
- 箱田 敬一（1991） 1991年秋～1991年夏の観察記録から、雑木林からの便り、15：13.
- 所沢市（1991） こんなところにこんな生きもの、所沢の自然、p. 172.
- 中川 利勝（1992） 狹山丘陵のオオムラサキ、寄せ蛾記、64：1350-1354.
- 中西 明徳（1992） 今、日本で最も新しい博物館から、昆虫と自然、27(14)：11-16.
- 大原 賢二（1992） 徳島県立博物館、昆虫と自然、27(14)：17-22.

# 秩父市峯沢堤のトンボ

新井 谷

埼玉県秩父市大字大宮と大字大野原との境に峯沢堤と呼ばれている水田かんがい用の溜め池がある。ここは筆者の勤務する職場の近くにあるため、昼の休み時間を利用してトンボの調査を行った。以下、その結果を報告する。

## 調査場所と方法

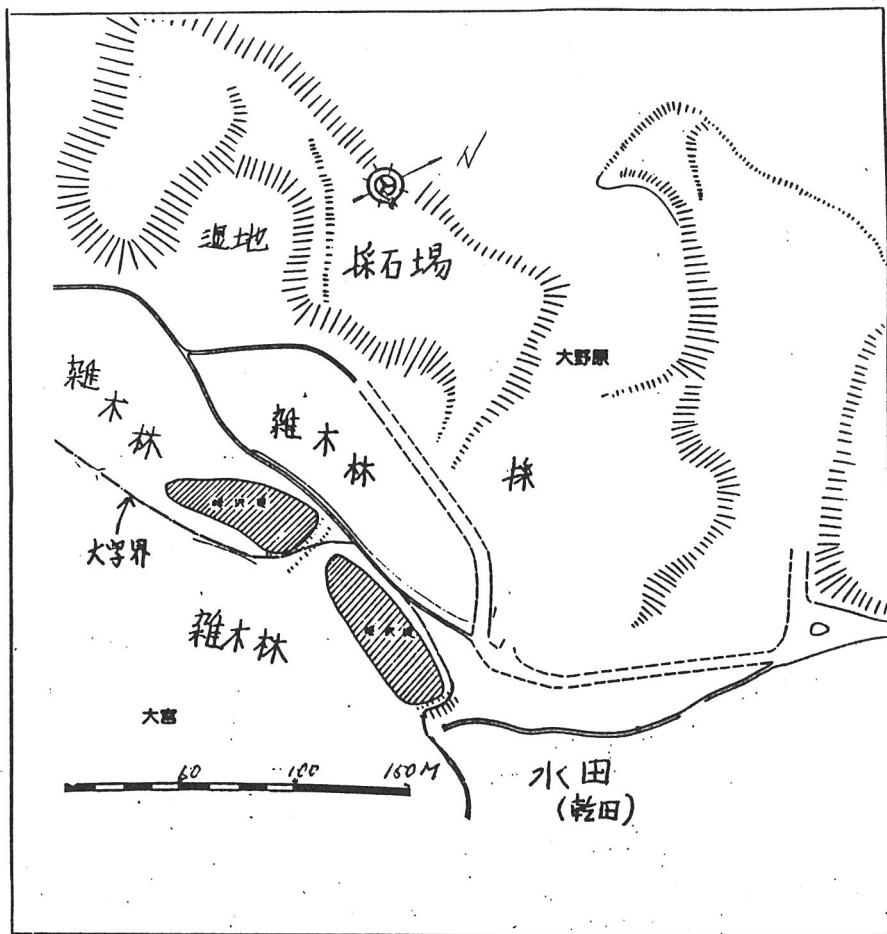
峯沢堤は図1に示したようにコナラやニセアカシアを主とする落葉広葉樹林に囲まれた場所にある。東西に並ぶ2つのすり鉢状の溜池である。2つの池は幅1mほどの堰堤で区切られて、西側の方が高いため、西側の水は細い水路により東側の池に注いでおり、西側の水はコンクリートの水路によって、水田に引かれている。池の大きさは西側のものが周囲約170m、東側のものが約200mで、底には落葉や倒木が溜っている。水面には水生植物や浮葉植物は全く成育していなかったが、1990年には東側の池にのみ水面全体を被うほどヒシが密生し、その後1992年にも中央部の一部にそれが発生した。両方の岸辺には、アズマネザサ等のやぶで被われると共に、岸辺から深くなっている場所が多く、一部を除いて岸辺に降りるのは困難であった。池には、ブラックバスがきわめて多く生息し、コイやアメリカザリガニも見られた。調査は目撃による成虫と羽化殻による確認、及びザルを用いた幼虫のすくい取りによった。

## 調査結果

1985年から1992年までの8年間の調査結果を表1に示した。表に見るとおり、この池で見られたトンボは13~18種で年によって増減があるが、毎年羽化が認められる種は、コサナエとコシアキトンボの2種で、この両種は成虫の個体数も多かった。クロイトトンボとオオイトトンボについては1985年~1986年のデータが不明なのであるが、最近は両種共羽化数が増加してきたようである。ギンヤンマも毎年成虫の飛来と産卵が認められ、晩夏に多くなるが、その個体数は年較差が大きかった。本種は、毎年少なからぬカップルの産卵が認められたにもかかわらず、羽化個体の確認はできなかった。足場が悪いため、一部の場所でしか羽化殻の調査ができなかつたので、どこかで羽化している可能性もあるが、幼虫は池内に多数生息するブラックバスの餌食となって、羽化まで生存しないのではないかと推察される。事実、幼虫を調査しても、わずかの若齢幼虫が得られるのみであった。オオヤマトンボも毎年成虫が見られ、'92年には産卵も確認された。本種の場合には、少ないながら終齢幼虫も得られたことから、この池から羽化している可能性が高いものと思われる。ショウジョウトンボはここ数年増加傾向にある種で、'92年には羽化も認められた。シオカラトンボは個体数も多く、毎年多数の産卵がみられるにもかかわらず、羽化殻が見られなかつたのは不思議である。アカネ類は、アキアカネ、ナツアカネ、マユタテアカネ、リスアカネ、ノシメトンボ、コノシメトンボ、キトンボ、ネキトンボの8種で、このうち、キトンボは'86年と'91年に各1個体を目撃したのみで、極めて少なかつた。アキアカネとナツアカネの個体

数は多いが、交尾や産卵等の繁殖行動は全く認められなかった。リスアカネとマユタテアカネは、雑木林を隔てた湿地から多数発生している種で(新井, 1984; 1990), ここから飛来するものと思われるが,

図1 調査地の概要



産卵が見られることもあった。ネキトンボは最近増加傾向にあり、ここ3年間は毎年羽化が認められている。チョウトンボは、全県的に希少種となってしまったトンボで、「92年7月20日に雄と思われる1個体を目撲したのが唯一の記録である。またヤマサナエは'85年9月に終齢幼虫を確認し、翌年3頭の羽化殻を得たのみで(新井, 1986), その後幼虫や羽化殻はおろか、成虫も確認されなかった。

以上のように、この溜池では、コサナエとコシアキトンボ、クロイトトンボやオオイトトンボのように毎年多数羽化が認められる種と、毎年多数の成虫の飛来と産卵が行われながら、羽化までには至らないか、羽化しても少数であると思われる種、アキアカネやナツアカネのような繁殖を目的とはしない飛来種、リスアカネやマユタテアカネ等、近くの生息場所からの飛来種で、場合によっては産卵行動も行

表1 峰沢堤で確認したトンボ

種名	調査年	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992
クロイトンボ	?	?	●	●	●	●	●	●	●
オオイトンボ	?	●	●	●	●	●	●	●	●
モノサシトンボ	△	△	-	-	-	△	△	-	
オオアオイトンボ	-	-	-	-	-	-	○	○	
ギンヤンマ	○	△	○	○	○	○	○	○	○
クロスジギンヤンマ	△	△	-	△	-	○	-	△	
ヤブヤンマ	-	-	-	-	-	-	-	△	
ルリボシヤンマ	△	-	-	-	△	-	-	-	
コサナエ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ヤマサナエ	-	●	-	-	-	-	-	-	
オオヤマトンボ	△	△	△	△	△	△	△	○	
タカネトンボ	△	-	△	-	-	-	○	△	
シオカラトンボ	○	○	○	○	○	○	○	○	○
オオシオカラトンボ	-	△	-	-	-	-	-	-	
ショウジョウトンボ	-	?	?	△	○	○	○	●	
コシアキトンボ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
アキアカネ	△	△	△	△	△	△	△	△	
ナツアカネ	△	△	△	△	△	△	△	△	
マユタテアカネ	○	△	△	△	△	△	○	△	
リスアカネ	-	△	△	△	△	○	-	-	
ノシメトンボ	△	-	-	-	-	-	-	-	
コノシメトンボ	-	-	△	-	-	-	-	△	
キトンボ	-	△	-	-	-	-	-	△	-
ネキトンボ	△	-	●	○	○	●	●	●	●
チョウトンボ	-	-	-	-	-	-	-	△	
ウスバキトンボ	△	-	-	-	△	○	○	-	
合計確認種数		16	14	13	14	15	17	17	18

● 羽化虫確認 ○ 産卵虫確認 △ 成虫飛来のみ確認 - 未確認 ? 不明

う種、キトンボやチョウトンボのように付近に生息場所がないにもかかわらず、ごく稀に飛来する迷入種等から構成されている。

筆者がこの溜池の存在を知ったのは1980年で、以来12年にわたりこの池に通い続けているが、この間、池の水位が異常に低下したかんばつ年が2回あったほか、1990年頃に北側の一部の林がシイタケの原木樹として利用され伐採されたため、かなり明るい感じとなった。また、水鳥による種子の持ち込みによると思われるが、1990年には東側の池にはヒシが全面に密生した。このように、池そのものには手は加えられなかったが、池の環境は年により変化するようである。こうした変化に対応して、種構成や優先種が変化するものと思われる。この池が作られた年代は不明であるが、古の話によれば、少なくとも70年は経過しているようである。この池のトンボがどのような変遷をたどって今日のような種構成になったのか、今後どのように変化するのか、興味の持たれるところである。

#### 引用文献

- 新井 裕, 1984: 秩父市の小湿地におけるトンボの記録. 寄せ蛾記, 42:531-537.  
 ———, 1986: 池でヤマサナエ幼虫の生息と羽化を確認. 月刊むし, 185:40-41.  
 ———, 1990: 秩父市の小湿地における9年間のトンボ相の記録. TOMBO, 33:51-53.

(あらい ゆたか 篴369-12 大里郡寄居町末野 1233-2)

#### 桶川市内でクマゼミの鳴き声を聞く

大釜 章男

筆者は、桶川市内でクマゼミの鳴き声を聞いているので報告する。

鳴き声を聞いたのは、1992年9月5・6・8日の3日で、いずれも桶川市北2丁目の植木屋に植えてある木で鳴いているようだったが、近づくと鳴き止んでしまい、姿を確認することはできなかった。

(おおかま あきお 篴363 桶川市西 2-10-35 栗原マンション 2-204)

# 沖縄本島における蛾類の採集記録

市川 和夫・碓井 徹

報告者の内の碓井は、1991年4月下旬から5月上旬にかけて沖縄本島で昆虫類の調査に従事したが、その間4回の夜間採集をおこない若干の蛾類を得ることができた。採集品（採集者はすべて碓井徹）は市川が展翅し種名を調べ、次の43種であることを確認した。

これらのうち、ウスキクロスジナミシャクは国頭村与那の特産種、ウスモンマルバシマメイガ、ホソバウスマラサキクチバ（写真の個体）の2種は沖縄本島初記録である。採集品はすべて市川が保管しているが、他に種名のわからない個体が16ある。

[採集地] 大浦：沖縄県 名護市 大浦 (NAGOSI OOURA)

許田： 名護市 許田 (NAGOSI KYODA)

与那：沖縄県 国頭村 与那 (KUNIGAMI-SON YONA)

照首山： 国頭村 照首山 (KUNIGAMI-SON TERUKUBI-YAMA)

## [採集品目録]

### TORTRICIDAE ハマキガ科

1. *Cydia leucostoma* (Meyrick)  
ミナミツマジロヒメハマキ 照首山： 1♂, 4-V-1991.

### LIMACODIDAE イラガ科

2. *Narosoideus flavidorsalis* (Staudinger)  
ナシイラガ 照首山： 1♂, 4-V-1991.

### PYRALIDAE メイガ科

3. *Ancylolomia japonica* Zeller  
ツトガ 照首山： 1♂, 4-V-1991.

4. *Piletocera aegimiusalis* (Walker)  
クビシロノメイガ 許田： 1♀, 30-IV-1991.

5. *Camptomastix hisbonalis* (Walker)  
ハナダカノメイガ 照首山： 1♀, 4-V-1991.

6. *Nevrina procopia* (Stoll)  
ハグルマノメイガ 許田： 1♀, 30-IV-1991.

7. *Nacoleia satsumalis* South  
サツマキノメイガ 照首山： 1♀, 4-V-1991.

8. *Palpita nigropunctalis* (Bremer)  
マエアカスカシノメイガ 許田： 1♀, 30-IV-1991.

9. *Maruca testulalis* (Hubner)  
マメノメイガ 照首山： 1♀, 4-V-1991.

10. *Bradina geminalis* Caradja  
モンウスグロノメイガ 許田： 1♂, 30-IV-1991.

11. *Herpetogramma* sp.  
(ヤエヤマクロノメイガ?) 照首山: 1♂, 4-V-1991.
12. *Locusta muscosalis* (Walker)  
トサカフトメイガ 許田: 1♀, 30-IV-1991.
13. *Hypsopygia kawabei* Yamanaka [沖縄本島初記録]  
ウスモンマルバシマメイガ 照首山: 1♀, 4-V-1991.
- DREPANIDAE カギバガ科
14. *Hypsomadius insignis* Butler  
アカウラカギバ 許田: 1♂, 30-IV-1991. 照首山: 1♂, 4-V-1991.
- GEOMETRIDAE シャクガ科
15. *Eumelea biflavata* Warren  
オビベニホシシャク 大浦: 1♂, 2-V-1991.
16. *Tanaorhinus reciprocata confuciaria* (Walker)  
カギバアオシャク 照首山: 2♀ 1♂, 4-V-1991.
17. *Thalassodes antiquadraria* Inoue  
オオサザナミアオシャク 許田: 1♂, 30-IV-1991.
18. *T. immissaria inaminatus* Inoue  
サザナミシロアオシャク 許田: 1♂, 30-IV-1991.
19. *Antitrygodes divisaria perturbatus* Prout  
ミドリヒメシャク 許田: 1♂, 30-IV-1991.
20. *Scopula epiorrhoe* Prout  
ギンバネヒメシャク 照首山: 2♀, 4-V-1991.
21. *Idaea sakuraii* (Inoue)  
サクライキヒメシャク 照首山: 1♀ 1♂, 4-V-1991.
22. *Carige obsoleta* (Inoue)  
ウスキクロスジナミシャク 照首山: 1♂, 4-V-1991.
23. *Trigonoptila latimarginaria* (Leech)  
ツマジロエダシャク 照首山: 1♀, 4-V-1991.
24. *Cleora minutaria* (Leech)  
ヤクシマフトスジエダシャク 許田: 2♀, 30-IV-1991. 照首山: 1♀, 4-V-1991.
25. *C. injectaria* (Walker)  
リュウキュウフトスジエダシャク 許田: 1♂, 30-IV-1991. 照首山: 1♀, 4-V-1991.
26. *Hypochrosis festivaria manifesta* Inoue  
リョクモンエダシャク 照首山: 1♀, 4-V-1991.
27. *Corymica arnearia* Walker  
ヒメウコンエダシャク 許田: 1♂, 30-IV-1991.
- EPIPLEMIDAE フタオガ科
28. *Dirades kosemponicola* Strand  
アマミマルバネフタオ 許田: 1♀, 30-IV-1991. 照首山: 1♀, 4-V-1991.
- SATURNIIDAE ヤママユガ科
29. *Loepa katinka sakaei* Inoue  
ハグルマヤママユ 照首山: 1♂, 4-V-1991.

## SPHINGIDAE スズメガ科

30. *Acosmeryx castanea* Rothschild et Jordan  
ブドウスズメ 許田: 1♀, 30-IV-1991. 照首山: 1♂, 4-V-1991.  
31. *Macroglossum fritzei* Rothschild et Jordan  
フリッツェホウジャク 許田: 1♂, 30-IV-1991. 照首山: 2♀ 1♂, 4-V-1991.

## NOTODONTIDAE シャチホコガ科

32. *Rabtala cristata* (Butler)  
セダカシャチホコ 照首山: 1♂, 4-V-1991.

## ARCTIIDAE ヒトリガ科

33. *Asura alikangensis intermedia* Marumo  
ヤクシマコケガ 許田: 2♂, 30-IV-1991.

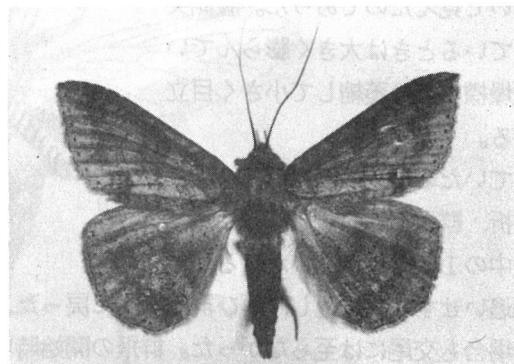
## NOCTUIDAE ヤガ科

34. *Carea internifusca* Hampson  
カバシタリンガ 許田: 1♀, 30-IV-1991.  
35. *Melapia bifasciata* (Inoue)  
クロフタオビクチバ 照首山: 1♀ 2♂, 4-V-1991.  
36. *Anomis metaxantha* (Walker)  
オキナワオオアカキリバ 許田: 1♀, 30-IV-1991.  
37. *Calyptra minuticornis* (Guenee)  
ミナミエグリバ 照首山: 1♂, 4-V-1991.  
38. *Plusiodonta coelonota* (Kollar)  
キンモンエグリバ 許田: 1♂, 30-IV-1991. 照首山: 2♀, 4-V-1991.  
39. *Ischyja manlia* (Cramer)  
オオルリオビクチバ 照首山: 1♂, 4-V-1991.  
40. *Hypersynoides submarginata* (Walker)  
オオシロテンクチバ 照首山: 1♀, 4-V-1991.  
41. *Ericcia* sp.2  
ホソバウスムラサキクチバ ♂

[沖縄本島初記録] , 写真の個体.

名護市許田: 1♂, 30-IV-1991.

leg. 碓井徹



42. *Adrapsa simplex* (Butler)  
シラナミクロアツバ 照首山: 1♂, 4-V-1991.  
43. *Hydrellodes repugnalis* (Walker)  
ソトウスグロアツバ 照首山: 1♀, 4-V-1991.

(いちかわ かずお 県336 浦和市南本町 2-7-11)

(うすい とおる 県362 上尾市壱丁目 454-3)

.....  
**オオホソオドリバエ♀の群飛について**

**牧林 功**  
 .....

標題について報告する。

1992年5月23日16時頃、県民の森（埼玉県秩父郡横瀬町）のミズナラ林の林縁で、オオホソオドリバエ *Rhamphomyia (Calorhamphomyia) formidabilis* FREY, 1951 の群飛を観察した。群飛はミズナラの木の枝先のへり、高さおよそ3~4mぐらいを、10数頭がホバリングしていた（図1）。下から仰ぎ見るとE字形をした、あたかもSFの世界の宇宙飛行物体のような代物で、じつにあやしげに見えた。これはと思い採集したところ、オドリバエ科に属する標記の♀であった。

採集した個体は第3、4腹節から側方に黒い板状の突起を突出させていて、興味深い形態をしていた（図2下）。この腹側突起と腹端部、それに後肢でE字状を形成し、その他の部位は淡黄褐色で色薄いため、このE字状をなす部分だけが空間に浮いて見えたのであった。腹側突起は生きているときは大きく膨らんでいたが、乾燥標本では萎縮して小さく目立たなくなる。

群飛していたのは♀のみで、♂（図2上）は時折、群飛集団の下を通った。すると群飛中の1頭の♀が追いかけるが、あまり深追いせずに引き返し、再び群飛集団に戻った。この♀が♂を追飛する行動は3回目撃できたが、いずれの場合も交尾には至らなかった。群飛の開始時刻は不明だが、16時には既に群飛しており、その後、日没までおよそ2時間ほど継続した。

オオホソオドリバエは日本特産種で本州、四国、九州に分布する。埼玉県からは初記録である。この小文を記すにあたり、種の同定をしていただいた三枝豊平氏（九大教養部教授）、この種に関する多数の文献コピーをして下さりかつ、懇切丁寧にご教示いただいた玉木長寿氏、見事な図（図2）を描いて下さった小堀文彦氏に深く感謝する。

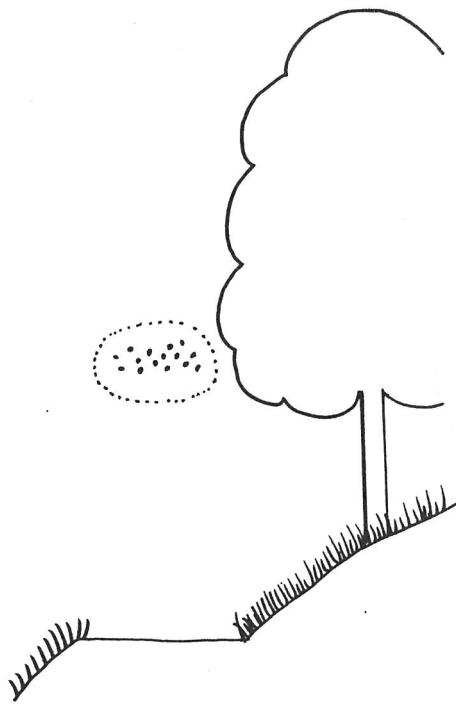


図1 (●) 内は群飛集団

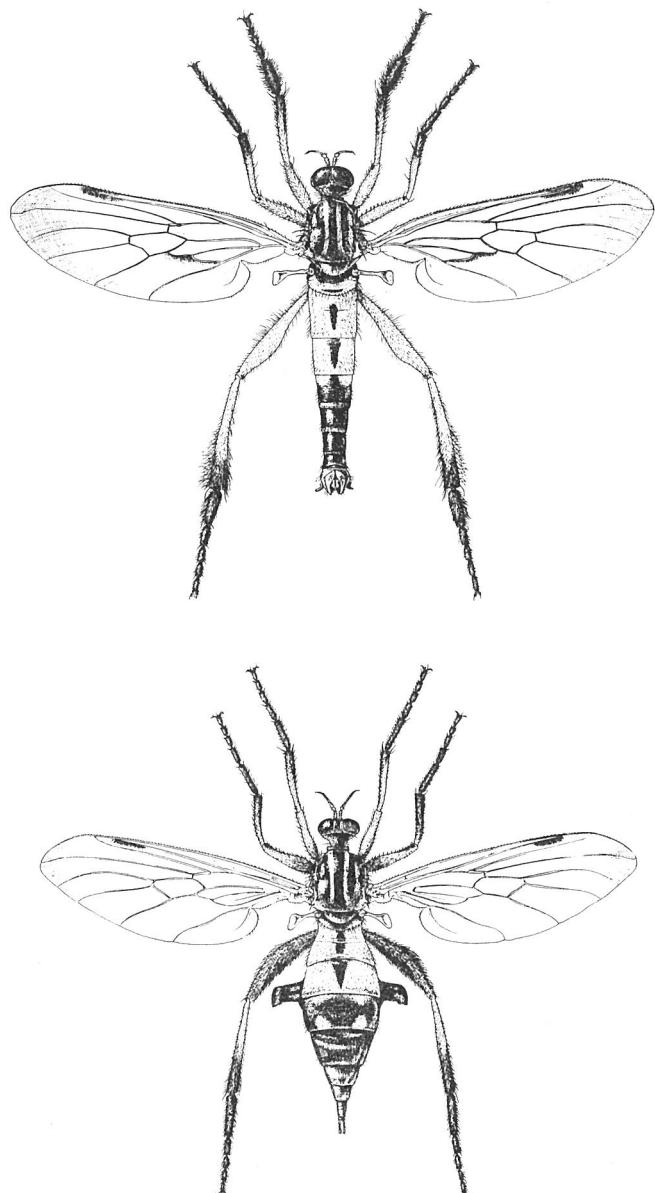


図2 *Rhamphomyia (Calorhamphomyia) formidabilis* FREY, 1951

(まきばやし いさお 〒330 大宮市天沼町 2-864)

.....

## 音楽の中の虫たち（5）

碓井徹

.....

連載の2回目に、CDとLDの総目録から虫に関わる音楽を探した話をしたが、その後、もっと強力な出版物を見つけた。

クラシック音楽作品名辞典 井上和男 編著 三省堂

である。B6版の大きさで1,161ページのこの辞典は、初版は1981年に刊行されており、手にいれた物は第11刷（1991年）のものであった。このような便利な資料を見逃す手はないところから、最初のページ（ちなみに、作曲者名を五十音順次並べたこの辞書の最初は、今世紀のアメリカの作曲家アイヴズであった）から丹念に曲名を眺めていき、ここに収録されている約38,000タイトルほどの中から70曲ほどの『虫と関わりのある音楽』を探しだすことができた。勿論、これで『虫に関わる音楽』がすべてではなかろうが、それでも、これだけの曲数をリストアップできたことは、かなりイイ線をいっているナ、とも思っている。後は、楽譜とCD入手するだけだ、・・・・・ 実は、これがやっかいな事なのだが。

さて、今回は、トンボに関する曲を2曲紹介する。

◆ LIBELLENTANZ

（トンボの踊り） -オペレッタ-

### LIBELLENTANZ

3

Operette in drei Akten

von CARLO LOMBARDO und Dr. A. M. WILLNER

Musik von

FRANZ LEHÁR  
ERSTER AKT

I. Chor

*Allegro non troppo.*

Klavier.

Soprano

Alt: Töricht ist jeder, der heut' beim Ofen hockt, während hell schimmernd des Winters Zauber lockt!

Tenor: Töricht ist jeder, der heut' beim Ofen hockt, während hell schimmernd des Winters Zauber lockt!

Bass: Töricht ist jeder, der heut' beim Ofen hockt, während hell schimmernd des Winters Zauber lockt!

◇ 作曲: FRANZ LEHÁR (1870-1948)

◇ 楽譜: LIBELLENTANZ, GLOCKEN VERLAG LTD, London

◇ 録音: おそらく未録音と思われる。

☆【作品について】 作曲者フランツ・レハール(壇)は、日本では特にオペレッタの作曲家としてその名を知られ、オペレッタ“メーリー・ウイドウ”や管弦楽曲のワルツ“金と銀”などは彼の代表作としてよく知られている。

本曲“トンボの踊り”は、前述の音楽作品名辞典で探しだした曲である。同辞典によれば、初演は1922年のミラノでおこなわれたらしい。イタリア語では、“La danza della libellula”というタイトルになるようだ。このオペレッタは全3幕から構成されているが(楽譜に、---Operette in drei Akten von CARLO LOMBARDO und Dr. A. M. WILLNER--- とある)，入手した楽譜は全てドイツ語表記であるうえに、この作曲者の作品解説本なども日本では出版されていないようで、この作品の詳しい解説はお手上げの状態である。この曲の中で“トンボ”がどうしたのか？ という事も、テキストがドイツ語なのでまったくわからない(筆者は、大学時代の第二外国語はなんとドイツ語であったのだが、授業にはほとんど出ていなかったので、自慢ではないが読み書きはまったく出来ない。授業に出ないで何をしていたかと言うと、・・・・・ トンボを探っていたのだ・・・・・)。何とか辞書を片手に強引に部分的な翻訳を試みると、『お洒落な』とか『刺す』とか『細い腰・・・(ウーム、あやしい訳だ)』などが“LIBELLE”という単語の前後に出てくるところから、もしかしたら登場人物の女性をトンボに喻えているだけなのかも知れない。

楽譜は、ピアノコンダクター譜(Klavierauszug mit Text)しか出版されていないようで、銀座ヤマハで取り寄せたこの楽譜には、『©1923/1951 by Glocken Verlag Ltd.』と書かれている。

そしてもう1曲。

◆ LA LIBELULA - Estudio - (トンボ -練習曲-) -ギター独奏曲-

*A mes chers amis Domino et Jean GIMON*

© 1239

LA LIBÉLULA  
ESTUDIO  
LA LIBELLULE  
ÉTUDE

Emilio PUJOL

Mouv. approx.  $\text{♩} = 112$

◇ 作曲: EMILIO PUJOL (1886-1980)

◇ 楽譜: LA LIBELULA -Estudio-, EDITION MAX ESCHIG, Paris

◇ 録音: プジョールの小品は、ギタリストが時々レコーディングしているが、私の知るかぎり、この曲の録音されていないようだ。

☆【作品について】 作曲者プジョールのことは、本連載の前回、やはりギター独奏曲である“熊蜂”的作曲者として紹介しているので、それを参照されたい。

作品は、“練習曲”とあるとおり、ギターのためのアルペジオと左手のスラーのための小規模な練習曲で、全部で24小節しかなく、指示どおりの速度で演奏すると2分にも満たない小品である。

楽譜には『©1965』と書かれており、“EMILIO PUJOL Bibliothèque de Musique Ancienne et Moderne = pour GUITARE =”という、ギタリスト達にはお馴染みの白地に赤文字のプジョール・シリーズの1曲として出版されている。



さて、これまで5回の連載でトンボの曲は5曲紹介をしたが、この他に、以下の2曲の存在をつかんでいる。

Dragonfly -トンボ- (Water Scene op. 13 no. 1) E. W. Nevin (1862-1901, 米)

Стрекозы -トンボ- op. 53 N. A. Rimsky-Korsakov (1844-1908, ロシア)

上の、ネヴィンの曲は、ピアノ独奏のための“水の情景 作品13”のなかの第1曲、そして、有名な作曲家であるリムスキーコルサコフの作品53は、合唱と管弦楽（またはピアノ？）のための曲らしい。

2曲とも、前述の音楽作品名辞典に載っていた曲であるが、両曲とも出版譜の有無を銀座ヤマハと東京文化会館資料室で調べてもらったが、残念ながら未出版のようだ。

前者は、作曲者ネヴィンの他の曲もほとんど出版されていないようだし、後者は、国外で出版されたリムスキーコルサコフの全集のなかにも収められていないそうで、国外の出版譜カタログを調べてくださった銀座ヤマハの楽譜売り場の担当者によれば、この作品全集（どこの国で出たのかは失念）では、作品番号50番代の前半がゴソッと抜け落ちているとのことである。

このような事から、この2曲の“トンボの音楽”は、現在、入手することは不可能なようである。

(うすい とおる 〒362 上尾市壱丁目454-3 )

北本市で得られたゲンゴロウ類6種と  
その生息環境について 1992年の観察例から

雛倉 正人

筆者は、北本市においてキベリクロヒメゲンゴロウ *Ilybius apicaris* SHARP を採集しているので記録しておく。本種の埼玉県からの記録は従来はっきりしない。北本市史(1990)によればキベリクロマメゲンゴロウ(学名および採集日なし)の名で記録されており、これが本種にあたるのかもしれない。

Data : 1 ex. 北本市高尾蓮沼 2. V. 1992 雛倉正人採集・保管

当地は荒川の河川敷の中にある古い河跡湖であり、首都圏の低地ではかなり珍しくなったコバンムシ(北本市史, 1990)やベニイトトンボ(碓井, 1991)が生息していることで知られている。夏季には沼全体がヒシの葉で覆われ、沼の南端にはアシやスゲが密生している。沼に浅瀬は少なく、また流入河川がない。

なお、当地に隣接する石戸宿にて、筆者が得た他のゲンゴロウ類の採集記録および観察例も、参考までに記しておく。いずれも過去に記録されている種ばかりだが(阿部, 1990 等を参照)、特に1992年は、自然学習センターの開設とそれに伴う工事により、環境に大きな変動が生じた年である。今後の環境の推移を見守るうえで、この小文が何らかの参考になれば幸いである。

1992年5月2日

チビゲンゴロウ *Guignotus japonicus* (SHARP) 5 exs.

セスジゲンゴロウ *Copelatus japonicus* SHARP 1 ex.

ホソセスジゲンゴロウ *Copelatus weymanni* BALFOUR-BROWNE 2 exs.

いずれも、谷を埋め立てて駐車場を造成中の所の、ごく浅い水たまりから得た。チビゲンゴロウは、ミジンコの多い、晴天が続ければ干上がるような所に群れていた。他2種は、改造した除雪用プラスチックショベル(松本らの方法, 1989)を用いて、水たまりの落ち葉をすくいとることによって得た。この水たまりからは、ごく普通の種である多数のヒメゲンゴロウ *Rhantus pulverosus* (STEPHENS) が現れたが、それらは、落ち葉が日に当たって乾き始め、自分の虫体が乾燥すると、上空に飛び立ち、しばらくすると戻って来て水中に飛び込むという興味深い行動を示した。このほか、この小さな水たまりからはコシマゲンゴロウ *Hydaticus grammicus* (GERMER) も散見され、さらに同行の荒木哲氏は、希少なホンシュウオオイチモンジシマゲンゴロウ *Hydaticus pacificus conspersus* REGIMBART を 1 ex. 得ている。しかしゲンゴロウ類の幼虫には乏しかった。乾燥と餌の量をも考慮すると、こうした水たまりが安定した生息環境とはとうてい考えられない(事実1か月後には跡形もなかった)。むしろ越冬後の成虫が工事により生息地を追われ、水たまりを一時的な避難所とした可能性が高い。

1992年6月7日

ホンシュウオオイチモンジシマゲンゴロウ 1ex.

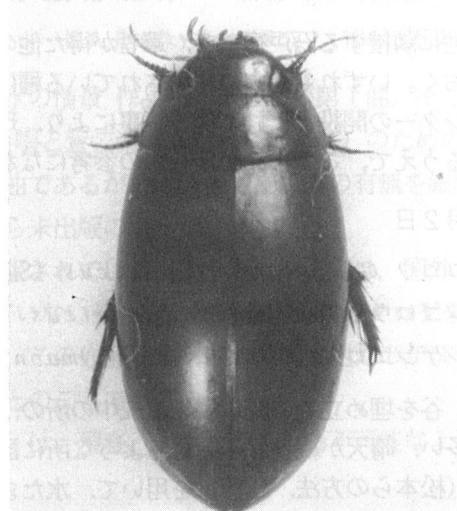
北里メディカルセンター裏の、日陰の湧水から得た。同所ではヤスマツアメンボも採集された。この谷筋の下は、車道で分断され、湿地の一部が駐車場として埋め立てられ、さらに観察舎が造られて、その前には池が造られようとしていた。しかし、以前より水量が減ったと言われているものの、湧水の方は健在であった。ホンシュウオオイチモンジシマゲンゴロウは、このほかの地点でも、湧水のある水温の低い所で観察例が少なくない。しかし本種が、湿地の中央の富栄養的な止水域まで、広く定常的な生息地としているのかについては、不明の点が多い。

1992年8月9日

ハイイロゲンゴロウ *Eretes stricticus* (LINNE) 1ex.

6月に観察舎の前の湿地（車道による水脈の分断で、以前から乾燥化が進んでいた）を掘り返して造った池には、動植物の姿が復活していた。昆虫では、都内の公園などでよく見かけるコシアキトンボの姿が目立った。しかしこ日の夕方見られたマルタンヤンマやネアカヨシャンマの群飛は、主として南側の工事の手が入らない谷筋で観察された。さて、ハイイロゲンゴロウは、この造成された池の、流れのある浅瀬に、数多くの個体が見られたが、この種も人工的な水域にしばしば見られる種である。この池に、自然度の高い環境に依存する種が、どこまですみつくかは今後の検討を要する。

末筆ながら、採集に同行して頂いた荒木哲氏、当地の地理を詳しく教えて頂いた磯野治司氏に感謝する。なお学名は、佐藤（1985）に従った。



(写真右：キベリクロヒメゲンゴロウ

*Ilybius apicalis* SHARP

北本市高尾蓮沼産)

#### 参考文献

- 阿部光典・笹井厚子 (1986) 北本市石戸宿の甲虫類. 寄せ蛾記, 48: 691-713.  
 阿部光典 (1990) 埼玉県産ゲンゴロウ類の記録. 寄せ蛾記, 56: 1024-1025.  
 北本市教育委員会 (1990) 北本の水生動物. 北本市史, 第三巻上, 自然・原始資料編, 245-273.  
 松本英明・荒木哲・森正人 (1989) 北海道のゲンゴロウモドキ類. 月刊むし, 225: 19-25.  
 佐藤正孝ほか (1985) 原色日本甲虫図鑑(II), 保育社, 大阪.  
 碓井徹 (1991) 埼玉県では記録の少ないイトトンボ科5種の記録. 寄せ蛾記, 61: 1176-1177.

.....

## 詩にあらわれた蝶(3)

荒木 素

.....

\* \* \* V \* \* \*

前回は、反則技が出てしまったが、あれかぎりでもうしない。

さて、今回は村野四郎の作品をひとつ採ろう。私は彼の詩の中では、詩集「亡羊記」の中のものが特に好きだ。しかし、ここに採るのはかなり早い時期の作品であり、読売新聞社の詩のコンクールに入選したものとのことである(大正十四年)。

昆 虫 採 集 箱

村野 四郎

|

小児の貪婪なんらんは日々につのり  
 (——かくして稚いゆめは食われ——)  
 数多い 小さい理解の犠牲者が  
 日にうつくしい遺骸おがいとなって並列ながれべられる

2

おさない手が青い留針を持って  
 美しいものの脊から胸へと刺しつらぬく

小さい科学者よ  
 防腐剤を忘れるな! せめて腐らぬ様に——  
 (「罠」所収)

村野四郎は、即物的表現ないしは客観的・相対的な現実把握によって特徴づけられる詩風の持ち主である。それはリルケや新即物主義との出会いによっていっそう深く自覚されるようになったが、ごく若いうちから詩人の中にきざしていたものあり、とりわけ博物学的な興味というかたちであらわれていた、とする人もいる。そしてそうした興味を醸成したものとして、村野の育った武藏野の当時はまだ豊

かであった自然と、恵まれた家庭をあげ、それがよく示されているものとしてこの詩をあげる人もいる。だからといって、「昆虫採集は情緒教育にとって・・・」とここで言ったりしたら、とたんに興ざめたものになってしまうだろう。

この詩の明るく、くったくのない詩い方をこそここでは味わおうではないか。

\* \* \* VI \* \* \*

誰にも最も愛する詩人というものがあろうが、二十代始めから今にいたるまでの私にとってのそれは、R. M. リルケである。彼の詩はかなりの数にのぼるし、外国語（フランス語）による詩作もおこなっている。詩人としての彼の名を不朽のものとした晩年近くの大作、「オルフォイスに捧げるソネット」と「ドゥイノ悲歌」には私はまだほとんど手をつけていない（人生は長いのだからこれからじっくりと読んでゆけばよい！）し、「形象集」、「新詩集」といった、彼が詩人としての声価を確立した詩集にはずいぶんと親しんだものの、その後の莫大な詩編——それらは生前詩人自身によっては、まとめられることができなかつた——には、今ようやく取り組み始めたところである。こうしたわけで、「最も愛する・・・」などと言っておきながら、私はリルケという詩人の全貌をいまだとらえるにいたっていないのだ。

さて、こうした前置きはさておくとして、晩年のリルケは、スイスのミュゼットの城館に籠って詩作をおこなっていたが、その時に作られた一連のフランス語による詩編から次の詩を引こう。1924年9月初めの作とされる。

### 美しい蝶

R. M. リルケ

地面に近く 美しい蝶が  
注意ぶかい自然に向って  
つばさの本をひろげて  
色刷りの模様を見せてゐる。

ひとが薫りを吸う花の端に  
もう一つの蝶が 翅を畳んでいる——  
これは読み方の時間ではない。  
そしてまだたくさんの ほかの蝶

小さな碧い蝶たちが  
ただよい 飛び 散りみだれる。  
愛の心のこもる便りの  
青い破片が ひらひら風に舞うようだ。

愛するひとがおとずれ来て  
戸口でためらっているちょうどそのとき  
その人に宛てて書きかけた手紙をこまかく引き裂いた  
その青い紙きれが 風に吹かれて散るようだ。

(片山敏彦 訳)

後期のリルケを特徴づける、あの難解さはここにはない。それは、ひとつにはフランス語という外国語による詩作、ということによるのであり、また一方ではフランス語という言語の特質にもよるのだろう。

リルケの詩には、彼の独自の解釈による意味を付与された基本語があり、さらにその派生語の使用法がある。そしてこのことが彼の詩、特に後期の詩を難解にしているといわれる。

次回は、そんなリルケの特徴をうかがわせる二編の詩を探ることにしよう。

(あらき たかし 〒399 長野県松本市寿台 2-4-23)

.....

## 埼玉県産ハネカクシ科分布資料 [6]

小田 博

.....

今回は5種を追加記録する(すべて本県未記録種). お忙しい中快く同定を引き受けてくださった渡辺泰明・柴田泰利の両氏に、また、いつもながら貴重な標本を提供していただいた内田正吉氏にそれぞれ厚くお礼申し上げる。

### 《ハバビロハネカクシ亜科 PROTEININAE》

156. チビハバビロハネカクシ *Proteinus crassicornis* SHARP. 1874

【秩父郡荒川村】熊倉山, 2頭, 1.x.1984.

※ シメジの一種と思われるキノコより採集した。

### 《ヨツメハネカクシ亜科 OMALIINAE》

157. *Xylodromus daimio* (SHARP. 1889)

【秩父郡横瀬町】芦ヶ久保, 2頭, 22.iii.1987 [1頭 渡辺泰明氏同定, 保管].

※ 枯ち木樹皮下より採集した。

### 《セスジハネカクシ亜科 OXYTELINAE》

158. キノカワハネカクシ *Coprophilus simplex* SHARP. 1889

【秩父郡大滝村】入川, 1頭, 3.ix.1991 [内田正吉氏採集].

### 《アリガタハネカクシ亜科 PAEDERINAE》

159. ヒメシリグロハネカクシ *Astenus brevipes* (SHARP. 1874)

【浦和市】秋ヶ瀬公園, 1頭, 19.x.1987; 2頭, 16.vi.1991.

※ 湿地の落葉下より採集した。

160. クサビナガエハネカクシ *Ochthephilum cuneatum* (SHARP. 1889)

【浦和市】秋ヶ瀬公園, 1♂ 1♀, 6.v.1991 [1♂ 柴田泰利氏同定, 保管]; 1♂, 16.vi.1991;

1♂, 1.vi.1992.

※ 湿地の落葉下より採集した。

## 浦和市南部領辻のクロスズメ採集記録

中川利勝

筆者は、浦和市南部領辻において、クロスズメの採集記録を得ているので報告する。

クロスズメ 1ex. 浦和市南部領辻 4. VIII. 1991

採集地点は、見沼代用水東縁の所謂『見沼たんぼ』沿いの、アカマツをまじえた雑木林の林縁部で、屋間、クヌギの樹幹に静止していた新鮮な個体を確認後、採集した。但し、ネットには収めたものの、殺虫管を持ち合わせていなかったため、三角紙につつむ作業中に、筆者の不手際から逃げ去られてしまった。以上の経緯から、確認のみの記録となり、標本の存在をみていない。

因に、埼玉県動物誌の市川(1978)の『埼玉の蛾類』には、クロスズメの記録地として、『浦和』の記載が見られる。

## 《参考文献》

市川和夫(1978)埼玉の蛾類、埼玉県動物誌; 301.

(なかがわ としかつ 県335 蕨市北町 1-13-10)

## 北本市石戸宿での未確認種、ヤママユガの採集記録

中川利勝

筆者は、北本市石戸宿において、当地での未確認種、ヤママユガを採集しているので報告する。データは以下のとおりで、標本は筆者が保管。

ヤママユガ 1♀ 北本市石戸宿 22. VIII. 1992

北本市石戸宿の昆虫相については、過去に埼玉昆虫談話会が調査を行い、『寄せ蛾記』特集号で既に報告されている。この『北本市石戸宿昆虫類調査報告』には、ヤママユガの記載は見られず、また、その後の新たな追加確認の報告も、本種に関する限り見当たらない。石戸宿のヤママユガについては、現在に至るまで未確認のままであったことのほうが、筆者にとって、むしろ意外な感があり、周辺地域の環境等を考えた場合、出るべくして出た当然の確認記録かと思う。

また、この日、同地にてコシロシタバ1ex., およびフクラスズメ1ex. (クヌギの樹液に吸汁していた個体) を確認しているので付記しておく。

## 《参考文献》

市川和夫(1986)北本市石戸宿の蛾類、寄せ蛾記 48 [北本市石戸宿の昆虫類(特集号)] ; 724-739

(なかがわ としかつ 県335 蕨市北町 1-13-10)

## 武藏丘陵森林公園で目撲したトンボ

西田時弘

比企郡滑川町の武藏丘陵森林公園で目撲したトンボについて報告する。写真撮影により同定できる個体に限った。

1. クロイトトンボ	<i>Cercion calamorum calamorum</i> (Ris)	1989年6月3日	1♂1♀交尾
2. コサナエ	<i>Trigomphus melampus</i> (Selys)	同上	2♂1♀
3. ウチワヤンマ	<i>Ictinogomphus clavatus</i> (Fabricius)	1988年9月1日	1♂
4. サラサヤンマ	<i>Oligoaeschna pryeri</i> (Martin)	1989年6月3日	2♂
5. ギンヤンマ	<i>Anax parthenope julius</i> Brauer	1988年9月1日	多数♂♀
6. オオヤマトンボ	<i>Epophthalmia elegans</i> (Brauer)	1989年6月7日	2♂
7. シオカラトンボ	<i>Orthetrum albistylum speciosum</i> (Uhler)	同上	1♂1♀交尾
8. コシアキトンボ	<i>Pseudothemis zonata</i> (Brumeister)	1989年9月1日	3♂

(にしだ ときひろ 〒261 千葉県千葉市美浜区稻毛海岸 5-5-35-504)

## 滑川町におけるサラサヤンマの記録

西田時弘

比企郡滑川町でサラサヤンマ *Oligoaeschna pryeri* (Martin) を採集しているので報告する。

サラサヤンマ 1♂1♀ 採集

採集日 1991年5月26日

採集地 比企郡滑川町羽尾二区

採集者 西田時弘

採集地は、三方を林に囲まれたやや細長い中規模のため池の奥にガマの群落があり、そのさらに奥の湿地でテリトリー飛翔していた♂が♀を捕らえて連結して飛んでいるところを採集した。

(にしだ ときひろ 〒261 千葉県千葉市美浜区稻毛海岸 5-5-35-504)

= 訂 正 =

寄せ蛾記65号 p.1411の【訂正】の ☆寄せ蛾記64号『狭山丘陵のオオムラサキ』のミスプリント…において、末尾の（訂正；玉木長寿）を（訂正；中川利勝）と訂正いたします。  
訂正の訂正で申し訳ありません。これは編集子の入力ミスです。お詫びします。

.....

## 川又の夜は、瑠璃色

碓井 徹

.....

宿舎の玄関先に積まれた数本の朽木の材をそれとなく気にしながら、ある者は夕食のレトルトカレーをかっ込み、その横では、『おやつ!』と呟いてコタツでカップ麺をする人もいる。また、机に向かって、持参したノート型パソコンのキーボードをパチパチ叩いている者もあれば、『スキタニルリシジミの蛹を探すんだ』と、トチの巨木の根際から持って来た一抱えの落ち葉を、丹念にひっくり返している御仁もいる。

ここは埼玉県秩父郡大滝村の川又にある東京大学秩父演習林川又学生宿舎、昨年11月28日の夕暮れ、ルリクリワガタ堀りを楽しみにやって来た面々の、落ち着かない風情である。

\* \* \* \* \*

『冬の初めに、またルリクリワを掘りに行きましょう』という声が誰からともなく上がったのは、夏の金曜セミナーの席上だったと記憶している。10月のゼミで、『日程は11月最後の土日』となんとなく決まってしまったので、いつものように秩父の佐々木和男氏を通じて演習林宿舎の利用を申し込み、11月28日の昼過ぎには、竹内 崇夫・石藏 拓・鈴木 幸・利根川 雅実・神久保 光津夫・築比地 秀夫・福嶋 美恵の各氏と私の合計8名が、手に手に朽木崩し用の武器を持って川又に集合したのであった。

メンバーが揃ったところで、さっそく車を連ねて入川渓谷に入る。林道入り口のチェーンロックは、工事車両の通行の便をはかってこの時にははずされていた。本来ならば、調査用にお借りした鍵でこのチェーンをはずさなければならないところである。

『高校生の頃は、この道には森林軌道の線路があってトロッコが動いていたナア・・・』などと思い出しつつ、車を走らせる。入川本流沿いから矢竹沢上部へ延びる林道は、つづら折りでグイグイと標高を稼ぎ、あっという間に標高1400mほどの林道終点に辿り着いた。この演習林で働いておられる佐々木氏からは、林道最奥のブナ林は落下種子の調査をおこなってるので入らないよう事前に言われていたので、ここから少し引き返し、数年前の春にルリクリワ堀を楽しんだ時と同じブナ林に狙いを絞った。

車から降りると、さっそく築比地さんがコッヘルで紅茶をいってくれる。暖かい紅茶で勢いをつけ、ゾロゾロと冬枯れのブナの林に踏み込む。時折薄日が漏れるような空模様だが、日陰の林床は凍ったままで、林内を流れる小さなせせらぎもそこここに氷柱が出来ている。築比地さんは、このせせらぎでワサビを見つけ手早くザックに入れている。すでにルリクリワ堀りを経験している余裕であろうか。

林内に入ってしばらくすると、各自が思い思いの朽木と格闘する音があちこちから聞こえ始めた。湿った林床に横たわる朽木の中はまだ凍っていたりして、ナタを振るうとシャーベットのような氷が飛び散る。急斜面の林内を右往左往しながら目ぼしい材を見て回るが、なかなか産卵マークのついた材が見つからず、誰かの『出たぞー』という声を、早く聞きたいような聞きたくないような、この手の採集につきものの例の精神状態に、私は早々と陥ってしまった。ゼフ卵採集もオサ掘りも、寒い季節の昆虫採集

では、いつだってこれだ。久しぶりのこの気分、悪くはないものだ。

冬の虫採りの楽しみは、そう！・・・・・宝探しのようなこの気分なのだ。

ここで、私の手元から、キラリと瑠璃色がこぼれたりすれば、申し分ないのだけれど・・・・。



林道終点近くの冬のブナの林

明るいうちに宿舎に戻ろうということで、3時には現地を発つことになっていたが、1頭も掘り出せない私は、若干あせっていた。小型のヒラタカメムシsp.を、半ば凍ったような材から10頭ほどみつけたのは嬉しかったが、やはりお目当てのルリクワガタも欲しいものだ。少しほなれた所でナイフを振りかざしている鈴木さんに声をかけてみると、どうも築比地さんが1頭掘り出したらしい、とのこと。さっそく、築比地ポイントへ行ってみると、皆で立ち枯れの巨木の残骸をせっせと削っている。この木には産卵痕もついているが、でてくるのはキノコムシの類ばかりで肝心のルリクワは2頭目が出てこない。

ルリクワにはお目にかかるまま、そろそろ出発の時間も迫って來たので、しかたなく『戻りますかア？』とあまり気の乗らない掛け声をかけあい、軽くない足取りでゾロゾロと車の方へ戻りはじめた。それでもみんな、手に手に1m近い材を持っているのは、さすがに虫屋魂、今晚の宿舎でのお楽しみという訳だ。

私も最後尾をテクテクと歩いたが、どうもスッキリしない。ツアー・コンダクターとしても、『これではいけない』という気がしてならない。そんなことを思いながら、ふと足を止めて山道の横を見ると、数メートル先に美味しそうな立ち枯れがヒョロリと突っ立っているのが目に入った。

『あきらめきれない！ 未練いっぱい！！』と叫んで、小走りでその木に近づいた私の目に飛び込んできたのは、なんとルリクワの産卵痕だった（私の虫採りは、いつもそうだった。出発の時間になってもあきらめきれず、あと少し・・・と言いながら虫を待ち続け、乗り物に乗り遅れたこともしばしばあった）。樹皮がはがれて剥き出しになった木肌に、おなじみのマークが点々とついている。下からは出発準備で車のドアを開け閉めする音も聞こえてくるが、この木は見逃せない、とばかりナタを振るう。

すぐさま、ルリクワのエリトラ2枚が出てきた。どうも死んでバラバラになっていた個体のようだ。『出たゾー』の声にみんな集まって来て、この枯れ木を取り囲んでせっせと削り始める。しばらくして、利根川さんがヒット、築比地さんに次いで、やっと現地での2頭目が出た。

こうなってくると、この立ち枯れをすべて削りたくなるのは虫屋の業だ。かと言って、これから全てを削り崩すには、あまりに時間がかかり過ぎる。事態の流れとしては当然のように、この立ち枯れは福嶋さんらによって1m前後の材にバラされ、せっせと車に積み込まれたのであった。誰しも、心はすでにルリ色だ。



瑠璃色に輝く？材を、これから車に積み込もうとする面々、後ろの車は神久保号。

林道を引き返し、キャンプ場近くで一息ついていると小雨が落ちてきた。良いタイミングで降りてきたものだ。この小休止の間、鈴木さんはスギタニルリの蛹を探そうと、トチの根際の枯れ葉を袋に詰めているし、竹内・神久保ペアは、メスアカミドリの卵を探している。私が、10年近く前にここでクロコムラサキを2頭採集した話をすると、すぐさまヤナギの幹にへばり付くメンバーもいたが、どれも不発。入川渓谷を出て、国道140号のドン詰まりの“豆焼き大橋”を見物してから宿舎にもどった。

車から食料品や防寒具、もちろん材も宿舎に運びいれ、日帰りの福嶋女史を駅まで送って行った竹内さんを除く6名が、演習林宿舎の八畳間に揃った。コタツもストーブもある。酒もある。そして瑠璃色に輝く？材もゴロゴロしている。11月の虫屋の生活としては至福の時だ。

台所にはいってナベを火にかけ、まずは腹ごしらえの支度。晩メシはレトルトパックのカレーが主流のようで、持参したカレーの銘柄と値段と味について比較考察をしたりして一時を過ごす。材割りは、竹内隊長が戻って来てから戦闘開始ということで、各々、瑠璃色の夢をみながら何とはなしに落ち着かない。

冒頭のシーンは、ここに続いている。

\* \* \* \* \*

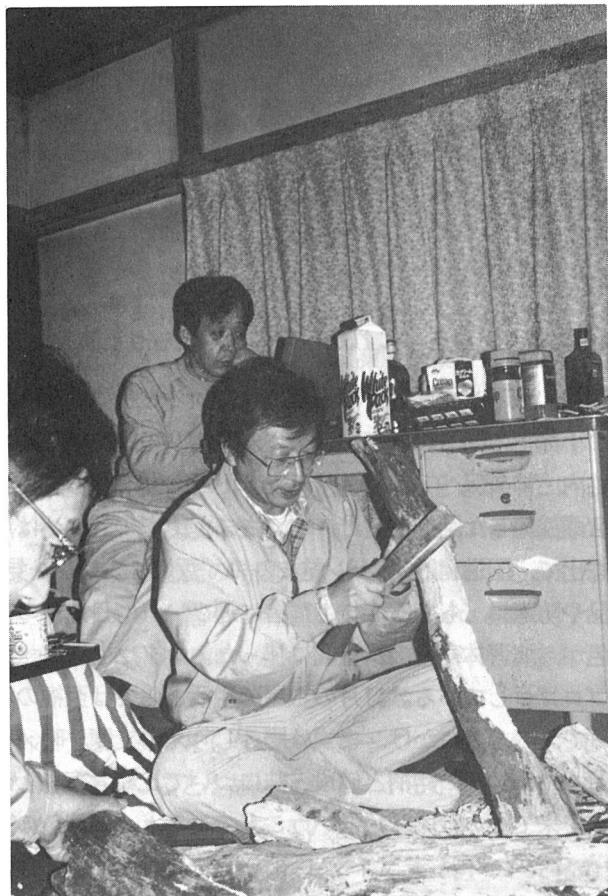
6時をまわってから、やっと竹内隊長が雨の中を帰ってくる。聞けば、三峰口からの電車が少ないの

で、西武秩父駅まで送ってきたとのこと。竹内さんはやさしい人だ。

隊長の腹ごしらえが済むのを待って、6時半、いよいよ材割りが始まった。各自、“コレ！”と思う材を玄関先から持ってきて、思い思いに削っている。しかし、なかなかルリクワは出て来ない。削れども削れども、出てこない。こんな筈ではないのだが・・・・・・、と誰しもが感じ始める。

やがて、酒がでて、オツマミも広げられて賑やかな座になる。お決まりのコースだ。現地でルリクワ1号を出した築比地さんは、宿舎に戻ってからも脚光を浴びた。なにしろ、川口からわざわざ持参した“シイの実”を煎って出してくれたかと思うと、日中、ブナ林のせせらぎで採ったワサビも、手際良くお浸しにしてくれた。夜が更ける頃には、新潟から産直で手に入れているというソバまで茹でてくれた。いずれも大好評で、石蔵さんなどは、煎ったシイの実を、『娘に持って帰ってやるんだ』などと言っている。築比地氏のこの姿を、『これじゃ、嫁さんはいらんなア』などとつぶやきつつ眺めている向きもあったが、本人にしてみれば、当地でのルリクワ掘りもこれで3回目、余裕たっぷりといったところなのでしょう（ちなみに、築比地さんが1987年11月14日に当地で採集したルリクワガタ♂♀が、寄せ蛾記52号の表紙を飾っています）。

豪勢なテーブルの上を  
気にしながらも、懸命に  
朽木と格闘していたのは  
神久保さん。初めてのル  
リクワ掘りということで、  
かなり入れ込んでいる様  
子。前日の金曜セミナー  
で急遽参加を決めた石蔵  
さんも奮闘しているし、  
他のメンバーも、時折思  
い出したようにグラスを  
ナイフに持ち代えて材削  
りに取り組むものの、や  
はり誰の口からも“出た  
ア！”の声が上がらない。  
昼間、私がエリトラを削り  
出し、利根川さんが成虫  
1頭をものにした御神木  
の材からも何も出てこな  
い。期待と失望と舌鼓と  
ほろ酔い気分とが渦巻く  
中、山から持ち帰った材  
も、いつの間にか、つい  
に最後の1本になってし



BGMに合わせてナタを振る私。聞こえている音楽は、Macintosh PowerBookから流れる、利根川氏提供の『蛾たち』！！という曲

まったく。

『これが最後の1本で～す』といって部屋に持ち込まれた材は、当然みんなの視線を集める。もうあきらめてしまった人、『残り物には福が・・・』と、お決まりの、そして本当によく当たる呪文を唱える人、『オオ、ルリ色に光っているじゃあないですか！！！』と、やけクソで叫んでしまった私。

\* \* \* \* \*

実は、ここでのルリクワ掘りには、『最後の一片まであきらめてはいけない』という鉄則があります。思えば1989年4月23日、ルリクワ掘りにやってきた何人かで今回と同じブナ林で材割りをしていた時のことでした。ハネカクシ採集で目の肥えている？小田博氏は、目星をつけた材を丹念に削って、立て続けにルリクワ♂を出し、『さすが！』と周囲を唸らせたあと、『これは・・・もう出ない。』と、その木片をポイと捨てたのでした。横にいた鈴木幸氏は、『いやいや、まだまだ』とばかりその木片を拾い上げ、なんとそこから1♂を削り出したのです。結局、この時に得られたルリクワは、この1♂3♀がすべて。

“小田氏、痛恨の一投”は、当地でルリクワ掘りをする人々にとって、胸にしっかりと刻んでおかなければいけない出来事なのです。

\* \* \* \* \*

さて、『最後の一片まであきらめてはいけない』という言葉を胸に、最後の1本にナタがはいるのを見守る。そして、ほのかな期待を抱いて待つことしばし、先の教訓は、実に見事に生きていたのだった。

懸命にナイフを動かしていた神久保さんから『オッ！』という声が上がり、手許を覗き込むと、材にあいた細長い穴からルリ色のエリトラが見えている。一つでると、勢いがつくものだ。幼虫も出てきた。成虫もポツポツ出てくる。この御利益のある最後の1本は、その後、各々の参加者によって少しづつ削られ、台所を担当した？築比地さん以外は、みんなこの材からルリクワを掘り出した。そして、1mに満たないこの材がすべて木屑になるまでに、なんと、成虫8ex. 幼虫6ex. が出てきたのだった。

奮闘した神久保さんは5♂・3幼虫、利根川さんはバランス良く1♂・1♀・1幼虫と、若干の多少はあったものの、屋間の分とあわせると、8人で、8♂・2♀・5幼虫・1個体分?の上翅と、少ない時間のわりにはマアマアの収穫であった。

一通り、みんながルリクワガタを手したので、あとはゆったり過ごすのみ。いつの間にか時計は12時をまわり、軒をたたく雨音も強くなっていた。疲れて早々と隣の部屋で寝入る人、木屑まみれで飲む人、コタツにもぐって話す人と、各々気持ちの良い時間を過ごしている。

全員が寝たのが2時過。翌朝はのんびりと起きて、それぞれ自分の日程にあわせてポツポツと帰路につく。私は、前夜の雨足からは予想できなかった好天の中を、豆焼き大橋まで再びドライブして写真を撮ったりした後、これ以上望めないほどの晴天の中を、あちこち寄り道しながら上尾へと向かったのであった。

## 寄せ蛾記 66号 目次

- 石塚 祺法：武藏野の雑木林の衰退と蝶の変遷（4） ······ 1413  
石澤 直也：狭山丘陵のオオムラサキに関する問題点 ······ 1424  
新井 裕：秩父市峯沢堤のトンボ ······ 1431  
大釜 章男：桶川市内でクマゼミの鳴き声を聞く ······ 1434  
市川 和夫・碓井 徹：沖縄本島における蛾類の採集記録 ······ 1435  
牧林 功：オオホソオドリバエ♀の群飛について ······ 1438  
碓井 徹：音楽の中の虫たち（5） ······ 1440  
雛倉 正人：北本市で得られたゲンゴロウ類6種と  
その生息環境について 1992年の観察例から ··· 1443  
荒木 崇：詩にあらわされた蝶（3） ······ 1445  
小田 博：埼玉県産ハネカクシ科分布資料 [6] ······ 1448  
中川 利勝：浦和市南部領辻のクロスズメ採集記録 ······ 1449  
中川 利勝：北本市石戸宿での未確認種、ヤママユガの採集記録 · 1449  
西田 時弘：武藏丘陵森林公园で目撃したトンボ ······ 1450  
西田 時弘：滑川町におけるサラサヤンマの記録 ······ 1450  
：訂正1件 ······ 1450  
碓井 徹：川又の夜は、瑠璃色 ······ 1451  
会報 ······ 1456  
編集後記 ······ 1456